

MAYDAY 一逆顎の願望成就一

黒の鴉・白の蛇

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

間桐さんちの雁夜君に超能力持たせてみた。

脳汁が暴走した。

出来上がりがこちらです。

ネタが続かないので休止します。

良さげなタイトルを思いついたら再開するかもしれません。

目次

能ある雁は頭蓋の笑う夜に軋む | 1

彼岸に隠るる乃ち佳なりて陰弁慶

18

齋戒の如く藤の朝露、将に生ずる様に朗

らかに | 32

明らかなる智よ、偵して探る目的を暴け

| 46

汝、己を律して道を行く者。されど骸は

交わらん | 60

苦しからずや、小さき白鳥は峰を行く

75

一房の浪治める庄、司るは夢く。

89

神の家は常に開かれている。その門戸は

広く | 102

能ある雁は頭蓋の笑う夜に軋む

その違いを自覚したのは割と早い段階で、それを口にしてはいけなと思ったのもっと早かった。

幼い頃から家族の隠し事が文字で見え、その中にはしつかり隠し事だと明記されている。だから、小さな俺はそれを口にしなかった。

やがて成長して、家の秘密を理解できる年齢になった時には、それが明らかに異常だと分かった。家の秘密も、俺の特技も。どっちもだ。

きつと俺の頭蓋を切り開いたりでもしなけりや、俺の特技について知ることとはできない。それぐらい有り得ないような異常性で、きつと誰も考え至らないような特異性だ。

俺は、接触した存在の情報を、文字として読み取れる。

それは単なる秘密だけでなく、それまでの履歴や、或いは未来まで。

対象も人に限らず、物、大気、固形液体問わず、何なら概念だって。

流石に概念を読み取るのは多大な労力があるが、出来ないわけではない。

現在から離れていくほど文が抽象化していくが、未来視も過去視もできる。条件を絞れば、内容もある程度具体的になる。

俺の前ではあらゆる秘密が意味を為さなかった。

俺の前ではあらゆる秘密が効果を見せなかった。

だから、初恋の人が大っ嫌いなジジイの用意した母胎候補だと知ってしまった。

ソレを知った俺は悩んだ。ああ、大いに悩んだ。

だつてこのまま普通に暮らせば、初恋の相手と付き合えるんだぜ？ 但し相手は蟲の

母胎になる、という条件付きだが。

割と喰つた末に、結論を出すのは一日と掛からなかった。諦めることにした。

つまり、あのいけ好かない幼馴染に譲ることにした。

いけ好かない。ああ、本つ当にいけ好かないが、あいつは頭もいいし、甲斐性もある。

きつと葵さんを幸せにしてくれるはずだ。

俺は葵さんに告白したこともないので、きつと向こうは俺の好意を知らないと思う。

あの幼馴染には、告白もせずに諦めたとみられている。

でも、それでいい。あいつはそれでいいのかと聞いてきた。初恋なんだろうと、見透

かしたことを言ってきた。

あいつは善意から言つたわけではないのだろう。多分、恰好付けた厨二のでつち上げ

たかのような家訓を誇らしげに実行しただけに過ぎないはずだ。

でも、この決断は俺の本心から洩れたものだ。だから、言つてやった。

「初恋何て、総じて実らないものだけ？」ってさ。
ジジイに対する嫌がらせを込めて、思いつきり皮肉って笑ってな。

これは、そうだな。ちよつと特殊な特技の有る俺の、騒がしい半生の物語だ。
語り始めはどれからにしようか。アレにしよう。ああ、アレしかないな。

それは俺が未だに初恋を抱えていた頃の話。

舞台は不思議の国よろしく、薄紙一つ隔てた向こう側。アリスよろしく孔を転がり落ちた先の、廃校の冒険譚。

ウサギも帽子屋も、王女様もいなかったが、代わりに仲間はいた。

俺と同じく、世間からズレた特技の持ち主。

そんな俺たちが、鏡の世界から抜け出す物語。

題して、

鏡界廃校探索 ワンダーランド

これは、外れ者の踏み外した道の世界。

じゃ、始めようか。

その日はまあ、特に面白みもない平々凡々な日常だ。

いつも通りの目覚ましで起きて、暗い屋敷にうんざりしながら視界端の文章テキストを無視し、そこそこの朝飯を食らい、遅刻しないように朝早くの人通りのない道に行く。

空は相も変わらず晴れていたし、綿雲は亀より遅く流れていく。

ウサギにでもなった気分で、雲の影を置き去りにして学校へ向かった俺は違和感を覚えてた。

妙に人が少ないのだ。

少ない。いや、居いないといった方が良いだろうか。

普段は二三人いる道には、ひっそりと静まり返っていた。

まるでゴーストタウンにでも迷い込んだかのように、怖いほどにシンとしていた。

音を立てれば吸い込まれていくようで、声を上げると何かに襲われるんじゃないかとも思うほど、静寂に満ちていた。覆われていたのだ。

軽い恐怖と共に、俺は歩き続けた。何故ならその程度の事で警察に行ったり、或いは家に戻る気が無かったからだ。そんなことをしてしまえば遅刻してしまうし、何ならうちの屋敷の方がよっぽどおどろおどろしい。

いつもの通学路は燦々と照らされている。しかし、生活音一つないだけでこんなにも恐ろしくなるものか。いつも通りの日常が目映るからこそ、聴覚の非日常さが際立つのだろう。例えばここが森であれば、こんな事態も当たり前として受け止められただろう。

俺は不気味な通学路からさっさと逃げ出した。

校門についても、まるで生徒の人影は見当たらなかった。

通学路だけではない。そもそも、葵さんと会おうとこの時間に出ている俺が、葵さんに会えないなんてことは殆どなかった。あるとすれば葵さんが病気に罹ったとかの場合のみだ。それでも、鼻持ちならない時臣の野郎はいつもの十字路に居るだろう。何せ、あいつはいつも俺より早く来てるのだから。

彼らに何かあつてどちらも学校にこれない事情があつたとしても、これまでに一人も人と出会わないのはおかしい。早いとはいえ、既に通学時間だ。おかしいにもほどがある。

校庭にすら人の跡は無い。見上げれば、まるで校長室前の学校のミニチュアを巨大化したように人氣が無い。昨夜、運動部がトンボで均しただろう平らかな砂が、一層作り物であるかのような雰囲気搔き立てる。朝練が盛んな弓道場にも、全く人の氣配がない。

招き入れるように開いた校門から見る限り、明りの灯った教室は存在しない。いや、そもそも職員室のあたりにも明りは見えない。幾つかのカーテンは閉まっており、教室の中を伺う事はできそうにない。人の影のようなものも、見えてはいない。

背中を押すように吹いた微細な風が、辺りに植えてある常緑樹を揺らし、梢の音を奏でる。

サアアアつと鳴ったその音は、意識の隙間に入り込むように細やかな物だった。

……今はそんなことにも不吉さを感じずにはいられない。この不吉さに耐え切れず、解消する為に、蟲爺にバレないようにあまり使わないと決めてた「特技」を、使おうと決心した。

俺は何気ない様子を装って学校の表札に触れ、目で浮かび上がる宙の文字を辿る。さてさて、一体何が起こっているのか。

【私立穂群原学園】

ほむらばら

総勢624名の生徒と43名の教職員を抱える冬木市の学園。

敷地面積：5・46km²

建設費用：8億1324万円（90・63万円／坪）

土地価格：3億129万円（60・5万円／坪）

設備：本校校舎

・普通教室 18室

・特別教室 3室

・職員室 1室

・校長室 1室

・客間 1室

・化学実験室 1室

・化学準備……

……とりあえず、ざっと見流していつも通りであることを確認する。
いや、最後だけおかし。

特記事項：幻霊顕現中……

生存者：6名

餓鬼：3体

異界深度：C

・干渉範囲：563km²・3

・干渉強度：B

・構造変異：E

・魔力濃度：D+

・浸食濃度：E [「解離性：解離度12%」]

これは、ああ、おかしい原因が漸く分かった。

要するに、この学校を中心として大規模に怪異が巢食っているんだ。

普通、それらは土地の管理セカンドオーナー人、此処でいうと遠坂が対処するべき事項だが……何分

「浸食濃度」がEだ。つまり、現実から離れていくタイプの怪異。故に、ただ単に過ぎているだけでは気づけない。確信をもって調査するか、或いはこうして迷い込むかしなければ、気付かないまま現実から剥がれて行くのだ。

それだけ聞けば、「放置していてもいいじゃん」となるだろうが、問題は中に人がいる場合だ。その場合、彼らは二度と現実に帰ってこられない。怪異に侵食され、餓鬼とな

るまで、そしてそれ以降も延々とこの世界を彷徨うのみなのだ。

現状の解離度は12%。時間当たりにとれだけ進行するのかわからないが、救出は早い方が良い。

救出。そう、救い出す。

この時の俺は、何を勘違いしていたのか。ありもしない責任感か、或いは糞の役にも立たない偽善か。兎に角生存者を助けようと決めていた。

奇しくもそれは自身の志す「一般人」の思考ではなく、目の敵にしていた遠坂のような思考であることに、今はまだ気づかない。

そして、俺はそれに気付かないまま、忌み嫌う魔術師共の住む「非日常」の領域に踏み入れていく。

レールを踏み越えた際に鳴った、校門の軋む音は鋼鉄の頭蓋が笑うようで。

否応なく、心は疑念と恐怖と、そして誤魔化しの蛮勇に満ちていく。

校庭の足跡を見る。何人かここを通ったのは確かだろう。それが昨夜の運動部か、それとも今の生存者かはどうでもいいことだ。

玄関の扉は締まっている。鍵は……問題ない。葵さげフンゲフン。鞆に紛れ込んだ髪留めがある。特技で開示した構造情報と随時照らし合わせれば、鍵開けなんて簡単だ。俺に開けられない鍵なんて然程ない。

問題は、この玄関の扉がピッキング防止加工をされていることだろうか。つまりお手上げである。

……別の入り口を探すか。

……職員室？
どうやら先に来た者もそう考えたようで、足跡は右へ続いているのが見えた。この先は

少なくとも、辿った足跡は職員室の窓の一つの前で消えている。まさか、これ鍵が開いてるのか？ 不用心な。

と思ったら本当に開いた。それこそガラツと。

外から見た限り、ロツクはかかっていた筈だ。訝しげに見ると、何故かロツクの固定具が外れていた。

壊された様子でも、経年劣化でもない。真新しいロツクは、中から丁寧に分解されたように、傷一つなく螺子だけが取られていた。それも最低限。外側の窓だけ。

どんな馬鹿がやったのだろうか。まあいい、今は助かったことに感謝しよう。

視界の端を、「黒」が過る。

見渡しても何も見えない。見間違えだろうか？

……いや、警戒だけはしておこう。俺は本格的に探索を始めた。

まずは廊下に出なければ。

職員の間を進み、ドアの前まで行く。

曇りガラスの向こうは暗い。電気がついていないのだろう。

耳を澄ましても自分の鼓動しか聞こえない。電気製品の駆動音、水道を流れる水の音

すら聞こえない。即ち人気が無いと同じ。

それを確認して、廊下に出ようとした時だ。

ピンポンパンポーン。

軽妙な電子音。放送の時によく使われるチャイム。

確か、放送は校長室か放送室からしかできない筈。

職員室と隣り合った校長室に人の気配はないし、多分放送室からだろう。

しかし……こんな事態なのに何をしているんだ？ いや、事態を認識できていないの

か？

そりゃああそうか、一目で怪異がいるかいないかって判断できるのは、変な特技を持つ

た俺ぐらいしかいないしな。

この時、あの声が聞こえるまでは、俺は、この放送が人の手によるものだと思っ
ていなかった。

『……ザザ……ザザ……皆サン、おはヨウ、ご、the、います』

電子音に変換されても感じる、産毛が総毛立つような悍ましい声。到底人の出した声
とは思えず、複数の動物の鳴き声を合成して無理やり人の言葉に聞こえるようにしたか
のような、不自然に過ぎる声。耳から蛆虫が寄生してくるような錯覚に思わず耳を抑え
てしまう。

それに構わず、遠い所で放送は続く。

『ほんじつは、たいへん、ニギヤ……かで、とテも、うれシイ、です』

不吉な声だ。

途中に聞こえた「賑やか」が、まるで人の断末魔にも聞こえる。

『でハ、凶も、楽シク、アソビましょう』

理解しがたい言葉も、体系化した言語として認識してしまっている。恐らく、俺は今、
生涯で最も言語を習得して後悔してる。これは日本語などではない。雑音が、偶然日本
語らしき音になっただけのナニカだ。

『いち時間メは、『かくれんぼ』De、す』

かく、れんぼ？

隠れん坊？

人の声に聞こえない声の中、妙に鮮明に聞こえた単語を反芻する。

その言葉は、薄暗い校舎とこれ以上なく不似合いで、でもどこか、これ以上なくらしくかった。

『では、がんばってください』

キヤハハハハ。

子供のような声に、先程まで感じていた不快感は拭われ、知らず知らずの内にしゃがんでいたことに気づく。

笑い声と共に金縛りのような硬直が解け、安堵と共に体に生気が戻る。

ホウ、と一息溜息をついて、先ほどの放送の内容について考える。直接あの声を反芻することは、忌避感により敬遠される。やめておこう。

まず前提として、全ての怪異には固有の『概念』、一定の『ルール』が存在している。例えば口裂け女であれば『マスクを着けている』『質問をする』など、様々な特徴がある。

逆に、それを満たしていない存在。例えばマスクをしていなかったり、質問をすつ飛ばして口を裂ぎに来る様な存在は、『口裂け女』とは見做されない。

つまり、『概念』と『ルール』とは、怪異に形を与え、存在を確かにする『枷』であり、『装甲』なのだ。

それ故に、全ての怪異にはルールに基づいた『攻略法』が存在している。

それを満たせば怪異から逃げきれるという類のものだ。

今回の怪異でいうと、まず「かくれんぼ」だろうか。これに勝てば、少なくとも今回の怪異をしのぎ切れる、とみていいだろう。

最低でも見つからない限りは怪異の影響に晒されないし、それまでは考えを纏める時間もある。

では、まず隠れる場所を――

ザッ。

ザザッ、

ザッ

ザザザザザアザザアアアアアアアアザザアアザア――

硝子向かいが黒く染まる。

「ッー」

咄嗟に身を伏せ、周囲を見回す。不味い。どこに隠れる？ 怪異は目前。あるのは机、黒板、モップ、掃除用具入れ、コピー機、紙入れ、ゴミ箱——！

ガラ、リ。

空気の蠢く音のみが静寂を破る。

いや、その蠢きですら静寂を掻き立てる材料のようで、職員室の静けさは一層影を濃くする。

——影。

そう、影である。

入ってきたのは、影だ。

不定形。靄の様な、霧状の“黒”。

そう表現するしかない、表現しがたい十二カ。

ズルリズルリと——勿論ながら、音はたっていないのだが——のたくる様に職員

室を泳ぎ、人間を真似た仕草で、その上部を下げた机の下を覗き込む。

一つ。

二つ。

徐々に不在を確認されていく隙間。

不在を証明され、隠れる場所が潰されていく。

この部屋にある机は、全部で32卓。

そして、十、二十、三十——！

頼む、と雁夜は願う。

懇願する切望する期待する。

そら、三十一つめ。通り過ぎ、次。

そして、最後の机の下が覆われて。

「——っ！」

そして、黒は飛散するように薄れ、空いていたドアから流れ出ていく。
ガラ、リ。

来た時と同じように、遠慮がちな開閉音を聞き、雁夜は漸く力を抜く。

息も吸わずにいた肺に新鮮な酸素を送り、工事音の様に煩わしい心臓をなだめる。目を閉じ、自身の生存に感謝をする。

ああ、生きてる——！

入っていた掃除用具入れから出て、涼しい部屋に戻る。

体格のいい俺がギリギリ入れる鉄箱は、滲み出た汗による湿り気と体温で、じんわりとぬくもりを帯びている。

伸びをする。別に体は凝ってないが、気分だ。

さて、まず第一波はしのぎ切った。警戒していたのが良かった。お陰ですぐさま行動に移れた。

次があるかは分からないが、今は他の生存者を探しに行こう。

……その前に、鞆は置いていくか。貴重品だけ懐に詰めて、後は窓際に置いておこう。走り回る邪魔になりそうだ。

それを、小指ほど空いた引き戸の隙間から、眺める瞳。

俺はまだ、それに気づけない。

彼岸に隠るる乃ち佳なりて陰弁慶

財布、ある。家の鍵——まあ、あんな家でも、家ではあるし——ある。後は生徒手帳と……ん？

ポロリと手帳の隙間から零れ落ちるものがある。見覚えのないものだ。黒い、トランプのようなカードだ。プラスチック製なのか、軽い割に硬度があり、しかし不自然に薄い。

拾い上げた面には俺の顔写真、名前、生年月日に血液型に興味に身体能力に……そんな個人情報網羅されていた。

すわ、ストーリーカーか。ゾワリと粟立つ延髄。怖いもの見たさか、恐れ交じりに裏返しせば、そこには右上に大きく『真理解剖』と書かれ、それ以外には何も無い、黒い面がある。

字は全て白であり、撫でると微妙に凹凸がある。つるつるとして、光沢がある、材質はプラスチックとしか思えない。

韌性を持ち合わせているようで、いくら曲げて折れる気配は無い。ぐぐいつ、と折り畳んでみようとしたが、手を離れた瞬間に元の形状に戻った。折れ目は見えない。

流石に訳も分からなすぎる。

だから、特技をそれに使用した。躊躇は無かった。

機能は能力と個人の証明。そして保存。種別はパスカード。製作者は……ほう、怪異か。道理で。

危機感が無いのは、特技でそれに危険性が無いことが分かったから。材質は石油で間違いないようだが、何処から調達したのか……加工もどうやったのか。

気にはなるが、迂闊に踏み込んで実は人体の一部を使っているなんて分かったら、悍ましくて仕方がない。

何でも知れるといえど、知りたくないものだってあるのだ。時臣の野郎のパンツとか、性癖とか。

……うん、制御が利かなかった時期は本当に酷かったな。ふらつと手を突いた壁から知らねーおっさんの露出オ○ニーを読み取ったときは流石にギャン泣きした。あれからだ。この特技を制御しようとしたのは。

因みにその壁はこの学園の塀の壁だったりする。それに気づいたのは入学してから。

適当に特技で記憶を読み取り、時臣の弱みを探そうとしていたところのことだった。二度に渡つて俺にトラウマを植え付けたのがこの学園の用務員だったことが判明し次第、俺は嫌悪感に耐えながらその用務員の性犯罪の証拠を迅速に集め、教育員会に匿名で突

き出してやった。ざまあみろ。

つか、女子生徒を脅して云々って実際にあるんだな。でも学校でやらないでほしい。切実に。あれ以来、三階の男子トイレが使えなくなつたんだぞ。どんだけお盛んなんだよ。

そんなことは今はどうでもいいか。気を取り直して、探索に移ろう。いつの間にか開いているドアを通り、右手に教室とかが長く続く行き止まりの廊下とすぐ傍にしゃがみこんだ少女を見て、こつちはあの霧の着た方か、と考える。

普通に考えればこつちは危険ではない。それは、霧が発生した原因がこつちに存在するだろうということである。行き止まりである以上、これらの何れかの教室、或いは掃除用具入れに原因が存在するとみる。そうなると、迂闊に近づいて、また同じような霧が出てくると危険に過ぎるからだ。

しかし、空間存在の怪異となれば大きく規則に縛られる。それは例えば殺し方であったり、或いはあ移動速度であったり、将又、存在端末数であったりだ。

もし、あの霧が単体でしか存在しないのであれば。こちらはほぼ安全地帯ということにある。そして、霧が出てきたということから、何かしら怪異に対するヒントがあるかもしれない。

故に、俺はこつちを調べることにする」

無意識の内に思考を口に出し、俺は歩き出した。

「……なるほど」

その後ろを、少女が付いていく。

そのことに疑問も持たず、俺は彼女の先導をしていく。

「——ん、異常なし。怪異はいないな」

「化け物、いません？」

「ああ、いないいない」

がらりと扉を開け、中に踏み入る。

俺はまず手前の教室から調べることにした。

ここは会議室だろう。奥の方にパイプ椅子と折り畳みテーブルが山のように積まれている。広さは他の教室の1.5倍ほどだろうか入り口側と奥側で別の部屋だった名残か、電気をつけても部屋の半分は暗いままだ。

「何も、ないかな？」

壁やテーブルなどに特技を行使し、この部屋で起こったことを読み解く。

当然ながら、この部屋で怪異が入った形跡はなかった。それを隠蔽した形跡もだ。

「外れだな」

きよろきよろ辺りを見渡す少女に隣を抜け、出口から出る。電気を消すのを忘れずに、と。

「わ、とと。置いてかないでくださいよ」

俺は扉を開けたまま立ち——待て、なんで俺はさつきと扉を閉めない？ 探索中に無駄にできる時間など無いことは、俺がよく知っている。疲れるようなこともしていない、故に休憩を取ろうとしているのでもない。

「まさか——っ！」

俺は自身に特技を行使する。

身長や体重などの項目を飛ばし、状態の欄を探す。

——見つけた。だが、異常は見当たらない。俺にかけられた魔術は無いし、誰かが俺に干渉しているわけでもない。

なら、他だ。俺ではないのなら、俺以外に何かをしている奴がいる。

異界内での基本だ。異常を感じたら、それが何であれ警戒する。

俺は凡人である。時臣の様な魔術の腕は無い。だから、異界で生き延びるためには注意深くなければいけない。

何もかもが異常な異界の、その殆ど全てを警戒する。とても心のすり減る警戒だが、俺は何度もこれに命を救われた。この心構えのお陰で、窮地を切り抜けてきた。

俺は、周囲の空間に対して特技を行使した。

指定した対象は、一定以上の知性を所有する存在。これで駄目なら、魔力を介している存在。それでもだめなら——と、そこまで考えて、それらが杞憂になるのを俺は知る。

「——君は、誰だ？」

「もー、女の子を置いてくなんて信じられな……え？」

俺は、妙に焦点の合わせづらい仮定少女に向けて、問いかけた。

「まさか、私の事、認識してたり……？」

頷いてやると、少女(?)は慌てふためいた。

「わ、わ、わ、ど、どうしよ、その、あ、あう〜！」

脇を通り抜けて逃げようとする彼女(暫定)の襟首を掴み、俺は言った。

「君は誰だ」

今度は、戸惑いを込めないすっかりとした意志で。

本来なら、この問いかけには意味がない。何故なら、俺の特技で簡単に知れてしまう

ことだからだ。

だが、何故か間断なく意識逸らしの術を掛けられているように、意識を集中させにくい。読み取る情報の解析は遅々として進まず、結果として本人に聞いた方が早いと考えたからだ。

「え、う、うう。は、放してください、さいませんよねえ、うう……」

「放さないよ。もう一度聞こう。君は、誰だい」

気の抜けるようなその仕草に、つい気が抜けてしまう。意識して作っていた声から陰が抜け、今度は優しく問いかけるようになった。

「私は、その」

語りだした彼女に、耳を傾ける。

「カクレザト ヨシノ隠岸佳乃、此処の穂群原学園の、二年生です……」

いつの間にか、俺に掛かっていた妙なものの影響は無くなっており、彼女は俯いて縮こまっていた。

「成程。君の特技は認識、いや、意識の操作、という事らしいね」

「はい……。このカードには、『認識奏作』なんて書かれてますけど……」

「まあ、そのカードの件は置いておこう。というかそれ、君が名付けたのかい？」

「そ、そんなまさか……！ 私が名付けるなら、もう少しかわいいのに、して……」
段々と尻すばみになる口調。人見知りなのだろうか。それとも、特技で人の認識を逸らせることができるために、対人経験が薄いのか。

「まあ、この話は置いておこう。君が色々知ってしまったのも……まあ、いいか。それについて二度と考えるな。不幸になるだけだからな。じゃ、さつき俺が入ってきた窓から出ていくと良い」

「……え、あの」

「なんだ。何かあるのか」

「その、キミちゃん……」

……？

言いたいことは、恐らく、友人が中にいるから心配で帰れない……というニュアンスでいいのだろうか？

まさか俺の事を「キミちゃん」と呼んでいるわけではないだろう、という常識的判断で俺は問かかける。

「友人がまだ中に居るのか？」

コクリ、と弱々しく頷く隠岸佳乃。先程から視線は下がっていくばかりで、前髪に隠れた表情を伺うことが困難になっていく。

「……はあ。その子の特徴を教えてくださいれば、こっちの方で助けだそう。なに、こう見えてもオカルトには強いんだ」

そう言つて、俺は自身のカードを隠岸に見せた。

「【真理解剖】、何て大きな名前だが、まあ、こういう事態の時は滅法役に立つ。安心してここから出なさい」

「は、はあ……」

近視なのだろうか。鼻頭がくつつきそうなほどに近づいて、俺の分のカードを読み始めた。

然程時もなく、決心に至つたようだ。流石に友人の為とは言え、こんなオカルト染みた空間にはいたくないのだろう。俺が言うのもなんだが、怪異に慣れていない一般人がこんなところで友人を探そうとできるだけ、大した胆力である。

「じ、じゃあ、その……外で待ってます、ね?」

「そうしていてくれ」

「キミちゃんは、その、眼鏡を付けてて、凄い真面目そうで、背筋が良くて……あ、黒髪で、此処まで伸ばして……」

隠岸は自身の腰辺りを示した。かなり長いな。この学校……ああ、そうか、女子の頭髪の規定はなかったな。

「髪は纏めないで、ストレートの、その、凄く真面目そうな子です。よろしく、お願い
しますね」

「ああ、任せてくれ」

自信は無いが、胸を張る。最初っから全員助けるといふ目標を立てている俺だが、内の何人かは餓鬼となつて怪異に取り込まれるとは思つておこう。異界に落ちて全員生還というのは樂觀的過ぎる考えだ。

会話は外で切り上げ、隠岸は職員室に入つていった。

なんでそこに……と思つたが、そういえばあそこの窓はずれてたな。

そこから入つたのか？

確かに玄関にはかぎが掛かつて……いや待て、なんで彼女はこんな時間に学校に居るんだ？

いやいや、確かに朝早いとはいえ、学生が登校するのはおかしくない時間帯で……？
え？

じゃあ、なんで窓から侵入したんだ？

……。

まあ、いいか。

俺は踵を返し、二階への階段を上ることにする。

明かりは陽の光だけ。必然的に暗くなる階段は薄汚く、そして錆びれたような印象を持つていた。

「さて、何処から調べたものか」

二階の間取りは一階のとはほぼ同じだ。玄関に相当する所が無いだけで、部屋の配置はほぼ同じである。

まずは向かいに立ち並ぶ教室。そして、廊下で二分された空間の階段側にも並ぶ教室。

外の光を取り入れるための窓が無いから足元は暗い。電気が点いていないのだ。

カチカチと脇にある廊下の電気のボタンを押すも、光は点かない。電気が通っていないようだ。

まあ、そりゃ、此処異界だしな。

電気が通ってるわけないか。

……あ。

これ、怪異騒動が終結したら電気線どうなるんだ？

断線してたり……休校か？ 自宅学習か？

やだぞあんな家に籠るのは。葵さんちに押し掛けるか？ それともどつかゲーセン

でも……。

「それは全部終わった後に考えるか」

捕らぬ狸の皮算用。と言つていいのかは分からないが、この状況を生き残れるのかすら怪しいのだ。まずは気を引き締めて、此処から逃げることに専念しよう。

「んじゃ、まずはこの教室からにするか……ま、そうだよな」

適当に左手階段側の教室を選んだが、とても暗い以外に異常は見えない。

極々普通の教室だ。

「あ、こいつ置き勉強してやがる。どれどれ……うわあ」

片っ端から机の中をあさり、一冊のノートを見つける。文字は読めないが。

その中身を見た直後は、字が汚いからだと思つていた。

けど、違う。

しげしげとみて、それに気づく。

ノートに書かれていたのは全て、鏡文字だったのだ。

特技で解析してみるも、これ自体は普通のノート。所有者の名前など、関係のない項目は読み飛ばした。

書かれている時まで読み取ろうとすれば、少し集中がいる。さらに、これはこの世界のアイテムだと断言できるので、何かしらの精神汚染を受ける可能性もある。

故に、此処に書いてあることを知るならば鏡を見つける方が良いのだ。

「……………どつかで鏡探さないといけないな。トイレ……………は嫌な予感がするから却下。窓際は……………うん、ベランダから襲つてきそうだな。どつかの女子生徒が手鏡を置き去りにしていることを願おう。最悪、特技で読み解けばいいか」

それは最終手段だけれども。

ノートを閉じ、何かの役に立つかもしれないので手に持ったまま他の机の中を覗く。探索続行だ。

その数分後の事だ。

廊下に隠岸が来ていた。先程分かれた彼女だ。

怪異であることを警戒し、まずは自分、そして空間に特技を行使する。そして続いて彼女にそれを向ける。彼女自身も協力してくれた——といっても、黙って触られただけなのだが——ため、彼女が本人であると確認できた。脈拍が乱れ、体温も少し低い。常はそのくらいだ。

因みに、何故こうも特技を大盤振る舞いするのかというと、そうしないと生き残れないからだ。

異界の中なら蟲爺の目も届かないし、遠慮する必要が無いしな。

ともあれ何事かと問うと、信じられない答えが返ってくる。

「窓、閉まっています……」

俺は薄暗い廊下の中、漸く隠岸が顔を青褪めていると気づく。

心細いのか、一步踏み込んでくる。しかしあまり他人が近寄るのは好きでは無い為、一步下がる。

それから俺は手で目を覆い、天井を仰ぐ。喉が無防備に空気に曝け出されるが、構わない。

「マジかよ……」

その四文字を言えれば、俺の感情は十二分に伝わるからだ。

枠外れた窓。それが直っているとはつまり、何かしらの超自然的な力が働いたという事。犯人が人間である可能性が限りなく薄い以上、そうとしか思えない。

そして、そうそう俺や隠岸のような特技持ちがいるとは思えない。故に、それは怪異の仕業だと仮定する。

だとすれば、俺らは閉じ込められたわけだ。

唯一の出入り口を、封じられて。

齋戒の如く藤の朝露、將に生ずる様に朗らかに

「まあ、それはもう、仕方がない。仕方がないな。うん」

軽く震えている。原因は明白だ。唯一の希望、というよりかは心の拠り所が消え失せたのだ。少し尻込みしたくもあるが、やるべきことに「脱出路を探す」という項目が加わっただけだ。大事は無い。些事だ。

「ど、どうしま……ししよう、か……」

目端に涙さえ浮かべた隠岸が俺に縋る。

というものの、流石に触れ合うほどに心を許してないので、半歩近づいてくる程度だ。怪異ではないと分かっているから、それを拒む理由もない。

いや、普段は葵さんに勘違いされないように他の女子とは距離を保っているが、今は非常時だから仕方がない。

要救助者が目の届くところに居るのもやり易くはあるので、それを咎めるつもりはない。むしろ、こんな訳の分からない状態なのだ。手を繋いでやるべきなのかもしれないが、あつちはまだ俺の事が怪異でないという確証を得られていない筈だ。彼女のは、俺の特技の様に便利な特技では無いからだ。

というかそうでなくとも異性と肌を触れ合わせるのは心理的なハードルが高いものである。特に思春期の俺らにとつては。

俺なんか、葵さんの手に触る妄想をするだけで悶える。

……あ、いけない。なんか顔が赤くなってきた気がする。

つまりそういうことだ。早めに同性の……キミちゃんとやらを見つけてやり、不安を解消させなければ。思いつめられて発狂されたら、こつちにまで被害が及ぶ。

具体的に言くと、怪異がおびき寄せられる。

「……………」

定期的な特技で自己診断していると、自身が隠岸の特技に影響を受けている記載があった。

それは対人距離パーソナルスペースの縮小。彼女がこんなに近づいても不快に思わなかった理由だ。ちらりと隠岸を見やる。その顔に罪悪感はない。

俺は嘆息一つ吐いて、その行動を見逃すことにした。こんな状況だ、心細く思うのは仕方ないだろう。

……それで俺のパーソナルスペースを狭めるのは、どうかと思うが。

というか狭めるなら自分のじゃないか？ 俺のを狭めてどうする。実はお前、人見知りじゃないのか？

「うし、じゃあ次の教室に行こう」

教卓の中も調べ終え、開けようのないロッカー以外は全て調べ終える。軽く調べるだけなので、さほど時間もかからなかった。

「あの、そんなことより、キミちゃんを探したいです……」

実は少し余裕があるだろ、君。

「そうはいつても、手掛かりみたいなものは見つかっただろう？ これも全くの無駄ではなんだからな。異界から脱出するヒントはいくらあっても良い」

そう言つて、暗に探索を中断するは無いという。

前例からすれば大抵の遭難者は一所に留まるし、じつとしていれば怪異と遭遇する確率もある程度低い。

本当にある程度だけでも。

そも、怪異の詳細も判明していないこの状況で集団行動とするのは危険な行為なのだ。

怪異は何故か人の多い方に惹き付けられる傾向があるため、むしろ犠牲者を増やす可能性もある。

とは言ってもそれらを説明するのはめんど、時間の無駄なので、端的に意見を切り捨てたのだ。

「その、キミちゃん……うう……」

……少し、悪いかな。という気がしないでもない。

別に女性を泣かせるといふことに罪悪感があるわけではない。というか、葵さん以外は女性として見れない。初恋を拗らせに拗らせているぜ。密かに誇っている事の一つだ。

隠岸が泣いていることに気後れするのは、小動物を虐めているような気分になったからだ。更によえば、子供の頃の——記憶に焼き付いている天使の具現と評すべき——葵さんの姿に重なったからでもある。

男は女の涙に弱い。

理由は少し違うけど、そういうことである。

「あー、分かった分かった。次は生存者の搜索にする。な？ それでいいだろ？」
途端に顔を上げる。ぱあっと花開いた笑顔の目端は赤くなっていて、本当に泣いていたと分かる。

友達思いなんだな、と感心した。まあ、知らない男と一緒にいるのが怖くて、知っている人と合流したいだけなのかもしれないが。

手に持ったノートを抱え直し、確認の為に聞き直す。

「その、キミちゃんとやらは図書室にいるらしいと、そういう事でいいんだな？」

「はい。本を返す為に朝早く来ましたから」

こんな朝早くにきて人がいるのか？

そんな疑問を抱いたことに気づいたのか、こう補足してくる。

「あ、キミちゃんは図書委員なんです」

「ああ、なるほど」

図書委員ね。

図書委員といえば、なんかあつた気がする。

何だったか……。

……ああ、そうそう、なんか図書室にも怪談話があつたな。詳しくは知らないが。

バカ話と一緒に聞き流してたからな……人死にが出る、という話ではなかったはずだが。

ダメ元で特技で調べてみるか？ いや、怪談話は図書室に纏わるもので、学校全体に

かかわるものではない。ここからでは調べられないか。

かといつて図書室で直接調べられるはずもない。目的は「怪異がいるかないか」を確認することなのだから、着いた時点で分かる。

「仕方ない。このままいくか」

古良き勇者御一行スタイルで廊下を歩き階段を上る。図書室は四階あたりだったはずだ。あまり行かないから知らないが。

階段は変わらず薄暗く、むしろ上に昇れば上るほど暗くなっていく印象を受ける。陽の光を邪魔する木々も踊り場の窓から見下ろせるのに、この薄暗さは何なのだろうか。

「図書室、図書室……つと、ここか？」

懐中電灯が欲しい。ここまで暗いと部屋の中も見れないし、怪異が傍によつても見えない。影と同化してしまうからだ。

「あ、ハハハ、ここですっ！」

「でもここ……鍵かかっているぞ？　そもそも鍵掛かっているのに入れるわけもなかったか。もう外に逃げてんじや……」

図書室は、その中でもより一層暗かった。というより、ガラスの向こうに黒い布か紙でも貼っているのではないのかと思うほど黒黒しく暗い。

その扉を開けようと取っ手に手を掛けるが、鍵がかかっている開かない。

これでは、そのキミちゃんも入れないだろうと思つたが……。

「あ、キミちゃんは図書委員なので合鍵があるんです」

「ちよつと待てなんだそのガバガバセキユリテイ」

『上手く型取れた』って笑ったの、凄くかわいかったんですよ!』

「それ犯罪だよな。もしかしなくても犯罪だろ」

えへへ、とほのぼのし始めた隠岸と裏腹に、俺はその「キミちゃん」とやらが人格に難ありな人物なのではないかと疑い始めた。

こんな人気のない学校で、隠岸を置いて一人で図書室に行こうとしたり……あ、もしかして男なのか? それならそれくらい悪戯をしたがるだろうし、こんな空気だったらむしろ探検しつくすだろうし。

「ところでその、キミちゃんって男か?」

「いいえ、女の子ですが?」

「お、おう、そうか……」

随分と行動力のある女子なんだな。

うん。

世の中、そういうやつもいるか。

最も俺としては葵さんの様なお淑やかで清廉で嫺やかなこう、女の子らしく可愛い女性が好きだが。

「隠岸、ヘアピン借りてもいいか?」

「はい? 良いですけど……」

懐から取り出された予備のヘアピンを受け取るや否や、俺はそれを鍵穴に突っ込む。更に特技を鍵穴に使用し続け、ほぼリアルタイムで鍵穴の構造と状態を確認する。

実はこの学校、内側はピッキング防止されていないのだ。なんでそんなことを知っているのかというと、屋上に侵入するときにはげふんげふん、偶然手を突いたら知ってしまったのだ。

「かちやかちやくつと、良し」

カチリという手応えと共に、目の前に写された三枚の鍵穴の断面図がぐるりと回ったのを確認する。

開いた。

「…………う、うわあ。その、凄い手馴れて、るんですね……」

「しまった」

俺の特技はあまり知られていない。知っているのは仲のいい友人と蟲爺と時臣と友人たちが言い触らしたヤンキーっぽい先輩だけ……割と多かつた。

それでも、あまり知らないように立ち回ってはいたのだ。それが、こうも簡単にバレるだなんて……もしかすれば、俺も少し浮足立っているのだろうか。

確かに、校内を探索したくなる気持ちがわかると言った。それはつまり、俺自身にもその気持ちがあるという事だった。

普段騒がしい学校の珍しい一面を知って、好奇心が疼いているのだろう。怪異がいるとは知っていても、慣れによってさほどの恐怖を感じていない……いや、むしろパイスになっているのかもしれない。

「いいか、隠岸。このことは言い触らすなよ」

「え、あ、はい……」

「言い触らしたら、そうだな——」

「——もう、遅いかと思いますか？」

「あ」

ガラリと扉が開く。

目の前に立っていたのは、神聖さすら感じるほど美しく微笑む少女。

扉を開けたのはその子のように、その美しさは後光が指しているが如く。いや、むしろ後光が見える。

いや後光じゃねえなこれ、普通に光だ。蛍光灯だ。電気ついてる。

本当にガラスの上に黒布や紙があったようだ。

「あ、キミちゃん！」

「あら、よしのん。逃げてなかったの？ いつの間にかいなくなったのだから、いつも

通り逃げ出したものだと思つてたわ」

「キミちゃん！ 玄関も窓も開いてなかったの！」

「あらあら、それは大変ね。合鍵、渡した方が良かったかしら。当直の方がいるのだとは、寡聞にして知らなかったのだけれど……やつぱり先に誰かが入っていたのね。斎藤君、貴方ではないの？」

「いやいやいや、それはさつきも否定したよね！」

「知らない人っ！」

……あ、キミちゃんに隠れて見えなかったが、図書室内にはもう一人いたようだ。声からして男、でもなんかよつとしてそうだな。軟弱そうだ。

その印象は正解で、キミちゃんの脇から覗いた室内には中肉中背の少年がいた。

「そうだ！ キミちゃん、この学校おかしいよ！ さつきも変な黒いのが出てたし！」

「この学校つて……私たちの学校でしょ？ それにこれくらい古ければアブラムシの一匹や二匹——」

「——ゴキブリじゃないのっ！」

「あらあら」

「まあ、とりあえず。入ってしまったてもいいか？ そろそろ休憩したいところなんだ」
感動……かどうかは疑問だが、友人同士の再開を喜ぶことの邪魔をする。

申し訳ない気持ちはあるが、いつまたあの怪異が来るかもわからない。少なくとも鍵がかかっているなら、怪異の襲来を防げるかもしれない。

「話の続きはそのテーブルでしょう。まずは自己紹介からとかどうだ？」

「ええ、ええ。それもそうですね。ではどうぞ、此方の席へ」

意外と丁寧な、何処かの令嬢のような手つきで図書室備え付けのテーブルに案内された。鍵も掛け直し、明かりもあることから心も緩む。

俺ともう一人の男子が相席。正面にキミちゃんで、その後ろに隠岸。

何だこの座り方。

「では、まず私から。もうお二人は知っているのだけれど、律汝リツジヨ之通ユキミチと申します。穂

群原学園高等部、二年のものですわ」

本当にお嬢様のような言葉遣い。聖母像を彷彿とさせる微笑み。

そういえば、と。先程思い出しかけた図書室の怪談……というか噂話を思い出す。

曰く、「図書室には動く聖母像がいる」とのこと。

よくある階段ではなく、噂話のように語られていたのは、その話の中に暗いものが無かったから。

成程。この人柄なら「聖母」「聖女」と称えられるのも無理はない。

多分、男子の間でも有名なのだろうが……そこらへん、葵さん以外に興味ないから笑

顔で聞き流していた。

「あ、ぼ、僕は同じく二年の齋藤将生サイトウマサシです！ その、趣味はゲームで特技はカラオケです！」

「……か、隠岸佳乃、です。二年です」

「あら。ちゃんと喋れたのね。偉いわ」

微笑みながら隠岸を撫でる有様は、まるで母と娘のようだ。

自己紹介をしたにも関わらず蚊帳の外な齋藤君は、何処が居心地が悪そうにも思える。

ちらちらと視線を送って来たので、咳ばらいを一つして俺も自己紹介をする。

「俺は間桐雁夜、同じく二年。それでだが、この図書室に居た齋藤と律汝、お前らに聞きたいことがある」

「なんでしよう」

「なんですか？」

「お前ら、こんな感じの黒いカードに見覚えは無いか？」

テーブルの上に、例の黒いカードを乗せる。

ソレを見て二人とも心当たりがあつたようで、あ、と言つたのを契機に各々の懐を探り始める。

「私もあります」

「僕のもありますよ」

そうして写真のある面を上置きされた三枚のカードは、どれも同じような規格で、個人情報の部分だけが異なっていた。

裏面、つまりは特技の事とかが書かれている面は見えてないが……ここまで偶然が続けば、まさかとも思う。

俺は、俺のような人間は希少だと思っていた。実際に魔術師の存在すら世界中ではなく、異能者ともなればその中の数割もない。そう聞いている。

だから、同じ学校に多くの「特技持ち」……いや、「異能者」が集まるとは、つゆほども考えていなかった。

けれど、まさか——

「裏は、みていいのか？」

「……ええ、どうぞ。そちらのも見せていただいてよろしいですか？」

「構わない」

「あ、僕のもどうぞ」

「ありがとう」

——そこに書かれていたのは、「自己聖女」と「奮立勇者」という字。

その文字から実態を察することはできないが、その字を見ただけで俺は理解した。この怪異。発生したのは偶然ではない、と。

だって、明らかに俺らの様な特技持ちが集められている。

きつと残りの三人も、何かしらの特技を持っているのだろう。

だが、その目的は、何だ——？

その時である。

キーンこおん、ガァんこーん。

『——げん気に遊ばせたか？ 休みジカんにハいります。せエとの皆さんは、
育館”に、才あ、づまりく、ださい』
体

キーンこおん、カァんこーん。

訳も分からぬままに、事態は動く。

明らかなる智よ、偵して探る目的を暴け

俺は学校が怪異の影響下に置かれていると知り、直後に無駄な正義感を振りかざして突入。隠岸佳乃という同族の少女に遭遇し、他の生存者を探す。

探索の末、図書室にて更に二人の生存者……被害者に出会った。斎藤将生と、律汝之道。彼、彼女もまた、俺らと同じ特技の所持者だった。

特技持ち、異能者とも言い換えようか。

当初、俺は自分の意思で介入すると決めていたが……。果たして、それは本当に俺の意思だったのだろうか？

「……どうする？俺は、とりあえず行ってみてもいいと思う」

そう思ったのは、これが態々怪異から告げられた行動ゆえだ。

怪異にはルールがある。この場合、放送から聞こえる声はこの異界で順守すべきルールだと、そう思うのが順当だ。

大体のところ、探索の手がかりもないのだから、他の生存者も集うかもしれない場所に行ってみたいという意味もある。

「あら、随分と勇ましいのですね」

「えっ。間桐さん、危ないですよ！ あんな不審者の要求に従ったら！ だいたい、なんでこんな時間に学校に人がいないんですか！ 創立記念日でもないのに」

ん……？ 将生は怪異、というかあの黒い影の事を知らないのだろうか。

なら説明する必要もあるか？ けれど、むやみやたらに広めたら魔術の秘匿にも抵触しかねないのではないか？ 一人ぐらいなら脅し通せるが……やはり、魔術は少しぐらい真剣に学ばなければいけないか？

俺の暗示では、多人数への記憶消去はできない。魔力量的な問題で。

しかし……これからも怪異が襲ってくることを考えれば……いや、ううん……。

「あ、あの……その……外には、その、お化けが出るので……出たく、ない……です」
お化け。

お化け、か。

それで誤魔化せるだろうか？

全てが終わった後に、「実は夢だったのサ！」的な誤魔化しができるだろうか？

暗示込みなら……行けるかもしれないな。

……よし、説明するとしよう。

「聞いてほしいことがある」

そして、俺は自身が黒い影に遭遇したこと、この事態に似た事例を知っていること、度々遭遇していること、こういう時の経験や、対処法を説明して体育館へ向かう必要性を説く。

そうすれば隠岸と斎藤も理解してくれたようで、渋々ながら頷いてくれた。

場所は変わって、体育館前。

ここまでする道も照明が無く、非常灯だけを頼りに歩いてきた。

隠岸と斎藤が仲良く躓いたりもしたが、律汝や俺が支えて怪我をする事態は防げている。

確かに暗くて足元が見えづらいというのは分かるが……そこまで転びやすいのはびくびくしすぎてるからだと思うぞ。だから転ぶ度に辺りを見渡すな、隠岸。

そうして体育館の前までくると、扉の隙間から僅かに光が漏れているのが分かった。自然光にしては強すぎるから、照明だろう。先客かもしれない。

「着いたぞ。光が……うわ……」

「うわあ、その……」

「汗臭いですね」

汗臭い。すごく、汗臭い。

扉を開けた先に誰が居たのかは兎も角として、真っ先に漏れだしたのは汗の臭さだ。まるで体育の後のよう、鼻を摘まむほどでは無いが気に成る程度の汗臭さ。

その臭いの出どころは、入り口付近に転がる二人の少年だろう。

やれやれ、と肩をすくめるボーイツシユな少女も含めて先客は三名。

……俺を除いて六人。

最初に確認した生存者は、全員此処に集まったか。

「やあ、君たちもあのお化けに追われてきたのかい？」

肩をすくめていた少女が口を開いた。

それも当然で、脇に転がっている二人は息絶え絶えといった感じで、言葉を発する余力もないのだろう。

向こうから声を掛けなければ、こっちから声をかけていた。

「いや、怪異に追いかけてられてはいない。先程の放送を聞いて、此処に他の生存者が来ているかもしれないと思い、そして来た」

「……なるほど。じゃあ、一先ずは安全ってわけだ」

「う、うう……怖い、よお……」

全員が体育館内に踏み入り、背後で鉄扉が閉まる。

隠岸辺りが、怪異に入り込まれないようにと思つたのだろう。その隠岸の気配は唐突に消え失せ、辺りを見渡しても人影一つ見当たらない。

また、特技で隠れたようだ。

丁度鉄扉が閉まり切り、ガシャンと音が響いた辺りの事だ。

まずは情報提供がてらに自己紹介でも……と開いた口から、意味のある言葉が発せられる前に、それを遮る意思を持ったように照明は光を落とした。

「つな、なんだ!？」

「ほう、これはこれは、一体どういったトリックか……」

「うわあ!」

「あらあら、困りましたわね」

「……………」

そして、突如前方の舞台の赤い幕が左右に開く。

晒されるのは白いスクリーン。プロジェクターがカタカタと動き出す音と共に、簡素で奇妙な図形が映し出される。

ソレを一言で表すならば、「頭蓋骨」だろう。

だが、決して普通の頭蓋骨と同じではない。何故なら、その下顎が前後反対になつて

いるからだ。

でかでかと映し出されたそれは、入り口付近に居ても大きな迫力を与えられる。これで近づこう者が居れば、罰ゲームでいやいやさせられる以上に糞度胸があると言わざるを得ない。

俺らが呆気にと取られている間に、体育館のスピーカーがノイズ交じりに起動し、そして笑い声と怒声と悲鳴と嬌声の混雑したあの音が流れ出す。

『身ナさん、ドウぞ喪つとマえへ。是ヨリ 全校朝礼 ヲ 初めザ背て板ダきmat h』

今度は何故か、より人間らしく聞こえた……様なきが、しないでもない。

「全校朝礼……確か先の放送では、もう一時間目は過ぎてしまった筈ではありませんか？」

律汝がそう零した。

確かに普通に学校として言うならば、一時間目が済んでいるのに、全校朝礼をやるというのはおかしいことだ。

だが、此処は異界。「そういうこともあるだろう」と飲み込めてしまう程度の可笑しさだ。

大抵の場合、こうもあからさまな異常に脱出への手掛かりやヒントは存在しない。気にすることではないのだ。

怪異にとつて、獲物が逃げることは不利益で、その手掛かりは隠すべきものだ。隠すべきものが明らか様に見せびらかされるわけではない。

『春のカオリモ地下付いて北この頃——』
何か校長先生の挨拶みたいなの始まった。

「……」

暗くて顔は見えないが、きつと俺以外のやつも似たような顔をしていたに違いない。確信していた。

『——異常、近隣的美奈様二も、語迷惑お掛けしマシ他』

……結局、全くこの状況と関連性の見つからない、それでいてどこか聞き覚えのある「校長先生の挨拶」だった。

内容としては、運動会と、直近の事件、マイク漏れの謝罪……聞き覚えがあるのも当然な、珍しくもマイク設定の事故があつた朝礼で聞いた、校長の挨拶のそれだった。こ

の謝罪の後にマイクの設定の見直しがされたのだっけ。確かそれは、一年ぐらい前。

まさか、あの頃から怪異は根付いていたのだろうか。

『続イ手、診断書の発行ヲ行な今ス』

——来た。

ここからが重要そうな情報だ。

一言も、聞き逃してはならない。

『ホシサト コウキ 星里耕旗 ジュヨク エンヨウ 苑目遠洋 ホノ ヒヒト 仄火人——』

聞き覚えの無い名前だ。

先客の三人の名前だろうか。

『——シラトリ コミネ 白鳥小峰 アケチ ホームズ 明智探偵 フサナミ ショウジ 房浪庄司——』

ん？ なんかすごいキラキラネームが聞こえなかったか？

というか、これでもう聞き覚えの無い名前が六人……俺たちとは、関係ないのか？

俺は情報を得れない不満と、得体の知れない音声に名前を呼ばれないことへの安心を

同時に抱いた。

だが。

『——サイテン 齋藤将出律汝之道 カクシ 隠岸佳乃 マキ 間桐雁夜 ケイ ケイ、九命』

聞き覚えのある名前が呼ばれ、一瞬前の安堵が叩き潰される。

『異常、九命二、診断書を発行いたします』

……九名、か。

九、九……まさか、三体の餓鬼達もこの中に含まれているのか……？

だとすれば、彼らもまた、元特技持ちかもしれない。

それに「診断書」だと？

まさかあの黒いカードか。

診断書というには小さすぎないか？

いや、発行いたします、だ。まだ発行されていないということかもしれない。

『御テモト野、診断書 w o — t h e、ざぎ——皆様、でハ、継ぎの時間は オニごっ
こ です』

鬼ごっこ……今度は追いかけられるのか。

俺は良いにしても、先程の疲労困憊な二人には地獄だろう。

そもそも脱出の為の手掛かりも何一つ掴めていない。

「……くそっ」

暫く待っているが、チャイムが鳴る気配はない。

どうやら、継ぎの時間になるまでには猶予があると、そう見ていいだろう。

パツと電気もついて——いや、明かりも戻ってきた。

「はいはい、一寸いいかい？」

突然の眩しさに目を細めていると、手を叩く音が聞こえた。

前の、先の少女だ。

……改めてみると、随分と中性的な容姿だ。

男性服の方を着ていたら、男だと勘違いしていたかもしれない。

「私たちはそちらを知らず、そちらも私たちの事を知らない。敵ではないというのなら、ここらで自己紹介でもしないかい？ 私の名前は明智探偵、こっちで伸びてたのは私の幼馴染の白鳥小峰だ。どっちも高一」

「あー、どうも、白鳥小峰です。」

「……あ、僕は、房浪庄司。ええつと、高二、です……一応」

倒れていた二人の内、房浪庄司の方。

彼はとても貧弱だった。制服の上からでも分かるガリガリさ、人込みに紛れるだけで風邪を引きそうな病弱さを感じさせる、青白い肌。

制服などではなく病人服の方が、ペンよりも点滴の方が似合いそうな姿を見て、俺は即座に彼を心配した。

今にも死にそうなその姿は、初対面の俺でもそう思わせるほど弱弱しかった。

「どうも。私は律汝之道と言います。学年は二年ですね」

「間桐雁夜、同じく二年だ」

「それで、僕が齋藤将出。二年。で、こっちの……あれ？ 隠岸さんは？」
今更か。

「……………隠岸、佳乃……です」

「あ、いた……つて、え。なんで睨まれてるの？ 僕」

齋藤の言葉に、その場にいらないことが不自然になったために顔を見せざるを得なくなつた。

それを恨んでか、無意識か。隠岸は齋藤を睨んだ。

……………名前だけ、というのも事が進まない。

ちらりと自己紹介を始めた少女——確か明智ホームズ？ とやら——を見やれば、こっちに視線を向けていない。

何かしようとする気配も見られないから、俺は仕方なく話題を広げた。

「ところで、この黒いカードは見覚えがあるか？ 恐らく先程言われた『診断書』とやらだ」

「……………ああ、ありますよ」

「あるね」

「あー、はい。あります」

先客三人の返答を見て、俺は頷いた。

「そうか、俺たちも持つている。こつちに来る前に見せあった。そこでなんだが、良ければ、君たちの特技……もつと言うと、このカードの裏の面に掛かれた、きみたちの異能について聞かせてはくれないか？」

反応は様々。

「気まずそうなものから、訳知り顔の顔。こつち側には明らか様に嫌げな表情をしたやつもいる。隠岸だ。」

「俺の特技は『真理解剖』。触れたモノの情報を知ることができる」

「私は『自己聖女』……自己制御、とでも言いたいのでしょうか。言いにくいのですが、自分の体を自由に扱えます。カードには『自己を律する』とありますね」

「オレは、『閉鎖隠匿』。あー、『空間を鎖す』なんて書かれてるが、単に鍵が無くても鍵を閉めれるだけだ」

「私……いや、此処までひけらかして他人面もないか。ボクの特技？ とやらは『探偵気質』。『閉室を暴く』なんて書かれてるけど、うちの幼馴染が閉めた鍵を開けるだけの力だね」

「僕は『奮立勇者』って……ちよつと恥ずかしいな。勇気を出すのが人一倍上手いだけ

だよ。『勇気を増す』だって」

「……私は、『認識奏作』。今みたいに、『認識を操り』ます」

「僕は、その……笑わないで、くださいね？ えっと……『純破壊者』、『物質を壊す』だけの、それだけの力です」

「……？」

「みんなしてそんな顔しないでください！ ほら、此処にも書かれていますよ。僕だって、欲しくて得たわけじゃないんですからね」

「……これは、何と言うか。」

「随分と、華の無い特技が集まってるな。いや、こんなに特技持ちがいたとも知らなかったけど」

「てか、あの青白い少年が一番の物理特化？ 意外性の塊だ。」

「更によえば、超能力っぽい能力って極少数じゃねえか。どうやって純粋な能力と特技を判別してるんだ？」

「つと、そうじゃないそうじゃない。」

「折角特技の情報を引き出せたんだ。ここから発展させないと。」

「えーつと、此処から脱出するのに直結しそうなのは……。」

「房浪、か。お前の特技で学校の壁や窓を壊して脱出とかできないか？」

「難しいと、思います。ここに来る前にやってみましたが……外の金網のところに触れることもできませんでした。歩いてるのに、近づかないと言うか……」

……そうか。

折角見えた光明が一瞬で潰えたが、それだけでへこたれる事は無い。

大丈夫。きつと、何処かに脱出の手掛かりはあるはずだ。

……とはいっても、希望はまだ捨てられないもので。

気まぐれで、というか思い付きで、俺は明智に一言聞いてみた。

「なあ、明智。この事態の解決法とかわかってたりしないか？」

「大体の予測ならついているよ」

「まあ、だろうな……なにに!？」

なにに!？」

汝、己を律して道を行く者。されど骸は交わらん

——えっ？

「お、おい。それはほ——」

「ああ、けど黙秘させてもらうよ。今はまだ語るべきではないからね」
「——んとう、か。えええ……？」

この怪異の正体が分かれば、解決法やら対処法が導き出せる。

ここは、何としてでも聞き出すべきだが……

「またそれかよ」

「おいおい。また、とは何だい？ あまり使ったことは無いだろう？」

「いや、割と使ってるぞ。この前の——」

「ああ、そういえばそうだったね」

「……はあ。いうべき時には、言うんだよな」

「もちろんだよ。ワトソン君」

「誰がワトソンだ」

「ああ、そうだね。君はワトソンというよりモ……んん、っ！」

白鳥と明智の会話からすれば、あの勿体ぶりはいつもの事なのだろう。

そうだとしてあの対応をしているのなら、少し聞いたくらいでは聞き出せないかもしれない。

しつこく聞いて、俺が疑われて、それで魔術師の話を少しでも悟られれば……ない、とは言いい切れないか。

俺は余り心理戦が上手いわけではない。惚けるのは得意で、隠すのが下手でもないが、時臣みたいなやつには劣る。

明智という少女は、時臣と似たような空気がある。天才特有の、何処かズレた雰囲気だ。

そうである以上、無暗な行動から間桐の裏の顔——及びそれに類することを暴かれる可能性もある。

更には言えば、彼女は「探偵」だ。名前ではなく、その在り方が。

先の「まだ語るべきではない」は、恐らくシャーロックホームズの影響だろうか。探偵小説に憧れて、感化されているのだとしたら、その好奇心も人一倍に違いない。

果たして、そんな子供が「魔術師」なんて（一見）素敵ワードに辿り着いて嗅ぎまわろうとしないなんて——まず、有り得ない。

反語を使う隙もない。疑問を差し込む余地もない。

それくらいの確信を俺は抱いている。

もし、彼女が俺の周りを嗅ぎまわれば……それは、怪異に殺されるよりも悲惨な目に合うに違いない。

苗床となるか、餌となるか。その特技を見抜かれて「魔術協会」とやらのホルマリソク漬けか。

最後の可能性は、最悪だ。これまで隠し通してきた俺の特技の存在にも気づかれる可能性がある。

そうすれば、あと数年で実る家出計画も、完成しない——！

こんな特技、魔術師からば垂涎物だ。

「根源」とかよくわからんところを目指しているらしいが、聞きかじったところ、恐らく俺の特技はそこへの特急券に成りえる。

最近この能力に慣れてきて分かったことだ。この能力は底があるが、拡張すれば恐ろしいことになる。

勿論、特技の拡張や強化何てできないし、どうするのか見当もつかない。

けど、魔術師なら？

——ああ、嗚呼。

駄目だ。それは、駄目だ。

こいつらが死ぬことになっても、これだけはバラせない。
悪いな。

所詮、唯の偽善で、最後まで突き通すつもりもない偽善だった。

これならいつそ、最初っから首を突っ込まなければよかつたのに。

いうべき時、か。

その時が手遅れになる前だと、祈るばかりだな。

明智探偵が間桐雁夜を見つめる。

その視線で穴をあけんばかりに、うつろながらその全体を視界に収め、「観察」している。

「……」

「どうしたの？」

「いいや、何でもないよ」

——彼からは、面白い感じがする。

ボクと似た雰囲気。そして、重大なことを握っている人特有の、小さな焦り。

うん。今回の事件、彼がキーマンになりそうだ。

さて、どう口を割らせるか。

誰か一人、犠牲者が出てくれないものか。

いつもなら彼に頼むんだけれど——

「……なんだ？ また俺がなんかしろと？」

「いや、今は良い」

——今は、駄目だ。

下手したら本気で死ぬ。

処置する暇なく、死んで——いや、取り込まれてしまう。

あのお化けの本質は、嗚呼。

優しい彼では相性が悪い。

死ぬのはダメだ。

他の誰であろうと、彼が死ぬのはダメだ。

犠牲無しにどうやって口を割らせるか。

それは難しそうだ。というより、犠牲が出た方がやり易い。

彼は守る。

オカルト何てマウントでも、ボクは戦おう。

ボクが、全部操って見せる。

このままここに居ても仕方がないので、体育館から出ることにした。

目的地は図書室。そこから行ける、『閉書室』の中の新聞。

その中の——どの記事かは分からないが、言い出した当人ならば見つけれられるだろう。

「じゃあ、忘れ物は無いな」

その場の全員の同意を確認して、体育館の扉を閉める。

明かりはつけたままにしておいた。万が一にも他の人が紛れ込んだ場合、体育館を指す可能性を上げるために。

廊下に出ると、先ほどは灯つていなかった非常灯が足元を照らしていた。

……というか、こんなもんあったか？ あったならさつきも光つてはるはずだが。

意識していないことで確認できるはずもなく、非常灯が元々ここにあったのか、それとも怪異の設置したもののなのかは分からない。

俺たちはそのまま階段を上がる。

一階から二階、そして三階——と行こうとした。

そこで、問題が一つ。

「閉まってる、な」

「閉まってますね」

閉まっているのだ。防火扉が。

二階から三階に続くその部分だけ、閉まっている。

鍵ではなくシャッターなので、俺には開けられない。確か、これ、開けるのには専用の道具が必要だったはず。

職員室にならなそうだが、その前にもう一方の方も確認しておこう。

「じゃあ、もう一つの階段に行ってみよう」

玄関の真ん前にある中央階段。

主に三年生が使う、体育館側の東階段。

そして弓道場側にある、移動教室時用の西階段。

この三つが本校舎にある階段で、西階段は最上階からしか使えないために、此処から行けない。

だから、三階に上がるには東か中央かのどちらかの階段を上るのが……

「……………こも、閉まってるな」

「閉まってるねー」

今度は律汝ではなく明智が答えた。

妙に明かるげだが、お前、状況分かってんの？

とか、言ってる場合ではないか。

これから職員室まで行って、道具を探して、無ければ用務員室か。

用務員室つてどこだったつけ？ 特殊教室側にあつたら、もうお手上げだぞ。

その時は消火器なりなんなりで壊し……壊せないだらうなあ。

なら房浪に頼むべきだろうか。彼がどの程度の物まで壊せるかは分からないが、全くの手掛かりなしよりはましだろう。

「よし、これならいけそうだ」

「ん？ 行けそうつて、何がだ？」

突然頷いた明智に、俺は聞いた。

何か開ける手段でもあるのかと。

明智は肯定で返した。

「うん。僕のあの——『探偵気質』だつけ？ なら、閉所条件を満たしているこの扉を開ける。『閉所を開く』力だからね」

「なるほ、ど？ それならさつきもできたんじゃないか？」

「いやー、なんか知らないんだけど、僕が『閉ざされている』つて確認しないでできないんだよね。確認できても使えないときあるし。ああ、でも今回はできそうだよ」

「そうか。そういうものなんだな」

使用条件がある、というのものもあるのか。

いや、俺の『触れたものに行使用する』というのもの、見方を変えれば『触れていないと使えない』制限があると言えるし、意外ではないのかもしれない。

「せーのっ」

その掛け声と共に、明智は防火扉に触れ——そして、消した。

「なっ——！」

「あら」

「えっ……！」

「……」

「わあ……」

いや、消えたのではない。開いたのだ。

上がりきったシャッターが真上に収納されて、完全に開放された状態になった。

だから、消えたのではなく開いたというべきだ。

閉じた状態から、開いた状態へ——。

これ、泥棒し放題じゃね？

仮にも探偵の持つ能力じゃねーな。

勇者名乗っておきながら泥棒強盗するようなもんじゃねえか。

……あれ？ 何か普通そうに思えてきた。

そーいや最近やったゲームでそんなシステムの有った気がする。

廊下は変わらず暗かった。

左右の足元が非常灯で照らされていなければ、歩くことも儘ならなかつたくらいに。

さっきまではこんなものは無かつただろうに、これは、見つかったら走って逃げろとでも言っているのだろうか。

廊下を歩いて、進んでいく。

一応確かめてみたが、どうやら上の階への階段も閉まっているようだ。

……これで、俺たちは三階から下に閉じ込められたというわけだ。

『閉所』では無いから、もう明智の特技も使えない。

一階から三階で、事が済めばいいのだけれど。

「着いた。図書室だ」

「きゃー！」

「あつ……あつ……ごめんなさい」

悲鳴を聞き、勢いよく振り返ると、どうやら房浪が房浪にぶつかったようだということが分かる。

分かると言つても、声の聞き分けと大まかな輪郭から推測しただけだが。

そうか。ここ、暗いから前が見えないのか。

で、いきなり止まったから勢い余って……と。

怪異の襲撃ではないようで何よりだ。

図書室に入ると、先ほど俺たちが座っていた席が見えた。

あ、ちゃんと椅子入れてなかったはずだが、入ってる。律汝だろうか？

そういえば小学校の頃、特に低学年の頃、先生が椅子を引きつばなしにして席を立つ

た奴に『幽霊が座ってるからちゃん椅子を入れなさい』と叱ってたな。

……うん、まさかな。まさかそんなことで怪異が現れるわけではないよな。

「閉書庫は……こちらですね。けど、鍵が締まっています」

「鍵は無いのか？」

「閉書庫の鍵は、先生が持ち帰ってるので……」

なんで持ち帰る必要があるんだ。

「分かった。じゃあ、僕が」

ガラリ。これは、扉が閉まった音だ。

図書室の扉が閉まり、完全に『閉所』となった。

ガチャリ。これは、扉が開いた音だ。

閉所庫とは反対側、本棚の林の奥の方から、キイイと開く蝶番の音が聞こえる。

誰だ、という問いかけは意味がない。

最初に確認した生存者は六人。此処にいるのは、俺を除いて六人。

なら、後の一人など居る筈もない。

校内に居る人間は七人のみ。

校内で生きている人は、たった七人。

その七人が全員此処に居て、尚遠くから扉の開く音がする。

『――』

それは、怪異の登場だということだ。

「う、うわあああああ！」

蛇に睨まれた蛙の様に固まった俺らの中で、一番最初に動き出したのは房浪だ。

外見通り気が弱い彼は、悲鳴でもつて俺らの硬直を解き、そのまま後から崩れ落ちた。次に動き出したのは、隠岸である。

動いた、というのは適切ではないか。気づけば彼女は消えていた。彼女は自身の特技を最大限に発動し、自信を認識されないようにしていた。

そして一人だけ安全圏に脱し——いや、安全とは言い切れないが——残された俺ら六人は、危機的状况に陥る。

怪異の全長は二メートルほど。幅は分からないが、不定といった方が良いかもしれない。小さな山みたいな、黒い霧が凝縮したような質量ある存在感は、俺たちの肺を固めるだけの威圧感があった。

こんな狭いところで、あれから逃げる？

無理だ。

全員の脳裏に、その言葉が浮かんだ。

もう無理だと。逃げ出すすべはないと。

徐々に下がって、後ろ手に図書室の扉を開こうとする

「——駄目だっ！ 開かない！」

「そんなっ!?!」

「あらあら、それはまあ、大変ですね」

俺の声と、明智の声が交差する。

のんきな律汝の声が、何処かい苛立ちを煽る。

他の三人は……ああ、口を開ける事すらできないようだ。

俺の鍵開けで図書室の扉を開けてみるか？

そもそも鍵穴が無いから無理だ。

明智の力に頼るか？

ここから出ることはできても、結局袋小路だ。まだ、三枚の防火扉がある。

——開けては、いけないのか？

では、どうすれば生き延びられる。

そもそも、図書室に来たのが間違いだったのか？

ここで終わりなのか。どうすればよかったというんだ。

そう思ったその時。

「では、私が犠牲になりましょう。後は明智さんと白鳥さんに任せますよ」

悠然と、律汝が怪異に向かって歩き出した。

「鬼さん此方、手のなる方へ」

手を打って、余裕気に、怪異を見つめている。

——ああ、そうか。

『自分を御する』とは、そういう事か。

真つ白になつた思考の片隅で、小さく俺は頷いた。

……人として、壊れてる。

俺はそう、頷いた。

苦しからずや、小さき白鳥は峰を行く

律汝が、怪異に抱き着いている。

その制服が、白い肌が、白紙に墨を垂らしたように黒靄に浸食されていく。

だからだろうか、怪異はその場から微動だにせず。律汝の輪郭は朧になっていく。

あの黒い靄のような怪異には、どうやら質量があるらしい。

俺はそんなどうでもいいことを考えながら、目の前の光景を目に映していた。

呆然としているのだ。今までに犠牲となった人を見たことが無いわけではない。悍ましさなら爺の方が数段上だ。

だが、自ら望んで滅びに行くような、そんな精神異常者は見たことが無かった。

「——つ、今なら行けますね」

明智が何かを呟いた。

そして駆けだす。脇目も振らずに。

おい、何処へ行くんだ。

口に出そうとしたが、喉も舌も唇も動かない。どうやら相当混乱しているらしい。

見れば、明智は誰かの手を引いていた。視線を横に滑らせるまでもなく、それが白鳥

であると分かる。

その行動は白鳥にとっても予想外だったのだろう。腕を引かれて逃げる彼はよろめいて、けれどこういうのに慣れていたのかすぐに立て直す。

そして、行く先は……何故か、図書室の奥。

何故、自分から袋小路へ向かう？

「……うちに、早く……」

こういう時、俺はやはり凡人なんだと思い知らされる。

俺は予想外の事態に弱い。立て直しが遅いからだ。

時臣ならばこうはならなかっただろう。律汝が犠牲になるまでもなく、事態は解決していたはずだ。

いや、そもそもアイツが怪異を見落としてなければこうならなかったはずだが。

けれど、そういう欠点があるからなんだかんだけき合えているのだろう。今は関係ない話か。

あいつは、あれでも優秀で、天才だ。

何だったか……「余裕を持って優雅たれ」だったか。その家訓を守るアイツは、きつとこの程度では動揺しない。

気づけば、もう残り二人しかいなかった。隠岸は特技で気配を消したのだろう。怪異

に通じるかは分からないが、そもそも怪異に意識があるかわからないが、きつと無事だろう。

俺以外の二人は、おびえていた。房浪は頭を抱えて蹲り、斎藤は尻餅をついていた。

こいつ等は怯えていた。俺と同じように脅えていた。

けれど、俺と違って直ぐに立ち直った。

「間桐さん、房浪さん、明智さんに続きましよう」

そう言つて、斎藤は俺と房浪の手を引いて駆けだした。

俺はまだ迷つていた。律汝を助けるか、逃げるか。逃げるなら明智の向かった方に行くか、扉から出るか。

バカなことだ。律汝を助ける手段など無く、逃げ道の片方はすぐ後ろ。呆けている間に鉤を開けられるかを確認して、駄目だったら明智の方に行けばいい。

そんなとっさの判断ができない。手を引かれている時でも尚、俺は迷つていた。情けない。情けない。

なんて無様なんだ。

ああ、そりや当然だ。

俺は落ち零れなんだから。

意識が再起動したとき、俺は扉が強く締まる音と尾骶骨に走る鈍痛のみを感じていた。

光は無い。真つ暗だ。律汝は何処だどうしたのだ。俺は助けたのか、見捨てたのか。そもそもここは何処だ俺はどうしたのだ。

分からない。事態が分からない。選択肢が分からない。状況が分からない。

だから俺は、ゆつくりと情景を思い返す。

「小峰、鎖めて」

カチャリ、といった空気を感じる。

音でなく、肌で。肌よりも一層奥の、頭蓋骨の中の脳髄で。

鍵を閉めたのではなく、鎖す。訳が分からないが、俺はその瞬間、その扉はもう開く機能を失ったのだと感じた。

扉といっても、どの扉かは分からない。どういった扉かは分からない。

そもそもが真つ暗闇なのだ。陽の光も差さない黒だ。輪郭の区別もつかないどころか、輪郭すら見えない。

だから、そう感じた、というのが正しいのだろう。

「——さて、これで一応、この部屋は安全地帯となった」

明智の声だ。何を言っているのだ。

異界に安全地帯など無い。それはその全域が怪異の腹の中であるためだ。

いうならば魔術師にとつての工房。いやさ、異界は魔術師の工房にも応用されるが、その陣地の支配権は圧倒的だ。蟻と象ほども実力が離れていれば奪い取ることもできるだろうが、唯の子供ができるものではない。家の蟲爺ですら、他人の工房を乗っ取るのは大きな手間なのだ。それが三流魔術師であろうと、だ。

だからさ、此処が安全地帯なわけないだろう？　なあ、逃げないと。逃げ出さないと。でも、何処に？

「――」

駄目だ。

駄目だ駄目だ駄目だ。

駄目駄目だ駄目だ、全ツ然駄目だ。

俺は、役立たずなんだ。出来損ないなんだ。

落ち零れの失敗作なんだから。

「……ど、此処は。何処だ」

掠れるような声。気付けば口の中はカラカラだった。

どうやら、諦めていても「死にたくない」という気持ちもあるらしい。

自分でも聞き取りづらいと断言できるような言葉を、明智は拾い上げた。

単に、他の誰も口を開いていなかったかもしれないが。

「閉書庫だよ。電気は……つと、何処かな？」

紙が擦れるような音が聞こえた。明智が壁を弄っているのだろう。

多くの場合、扉のそばに明かりのスイッチはある。では、扉は何処なのか。

残念ながら閉書庫には窓が無い。扉にも覗き窓が無い。

それは怪異の侵入する隙間が無いという事であり、光が差し込む隙間が無いという事でもある。

当然、怪異は何処にだつて現れえる。早くここから出て、図書室を抜けて廊下に出た方がよい。

理性はそういつて、体に鞭を打とうとする。

溜まった乳酸の所為だろうか、どつと嘔き出る倦怠感と熱は俺をこの場所に縛り付ける。

暗いには暗い。今怪異が襲つてきても気づけないほどに、暗い。

けれども、それでも俺は安心を抱いている。今この瞬間に怪異が来れば、抵抗せずに死ぬだろう。それほど心に隙ができていた。

「ふう……あー」

床に転がつて、律汝の事を思い出して、自己嫌悪で丸くなる。

それでも自分が生きていることには安心と歓喜を覚え、そんな感情を抱く自分が嫌になる。

うーうー唸って床を転げまわると、何か固いものにぶつかった。

「ひいつー！」

房浪がその音に驚いて、悲鳴を上げる。

「なにになになになになんですかあつ?!」

「ああ、悪い。なんかにぶつかった」

「なんかって、何ですか?!」

それもそうだ。

閉書庫なんだし、きっと本棚だろうと思う。だが、銅像が置かれていないという確証はないし、これが本棚でないという証明も難しい。

だから確かめてみよう。俺の特技で。

「……ああ、本棚だ」

「……はあ」

返事は返ってこなかった。

すう、つと息を吸い込んで、浅く長く吐く。

深呼吸だ。心を落ち着かせて、波立たせないで。

平常心に戻るのは得意だ。見て見ぬふりをするのは十八番だ。

「そういえば間桐君。君、なんか僕と似たような力を持つてなかったかい？」

「藪から棒に、なんだよ」

律汝が犠牲になったことによる感傷を一旦切り離して、心の隅にでも放置する。大丈夫。もう混乱していない。

「君の力でこの部屋の電源の場所、分かったりしないかい？」

「できなくはない。ちよつと待つてろ……うわあ」

特技での情報閲覧は、光で認識してるわけではない。

使つても周りは明るくならないが、でも暗いからと言つて見えなくなるようなことは無い。

まあ、ちよつとだけ、感覚的にやりにくくはある。目を瞑っているのに見えるというのは、脳に混乱をきたすのだ。

けど問題はそれだけで、行使に際して支障は無いのだ。

何なら、目を瞑つても使える。寝てても使えるんじゃないだろうか。

「どうしたんだい？」

「……外だ」

「ん？ 何が？」

「電源だ。照明のスイッチだよ。図書室にあるんだ」

「う、うわあ……」

明智が何を考えて此処に逃げ込んだのかは知らない。

だが、明智の幼馴染らしき白鳥の特技を思い返してみると、恐らく閉所室と図書室——率いてはこの学校に生じた異界その物を切り離れたのだろう。

もはや怪異であろうと入ってこれない。そんな感じに。

落ち着けば、色々と思考も追いついてきた。

だからこそ電気がつかない、ということの重大さにも気付いてくる。

ここは閉書庫だ。明智は調べたい資料があると言い、律汝は閉所室にあると答えた。

ここは閉書室だ。明智が求める新聞がある閉所室で、けど明かりが点かないから調べ物ができない。

ここは閉所室だ。明かりのスイッチは外に怪異と共に、俺らはこの鎖された空間に居る。

明智は、恐らく調査がてらに此処に逃げ込んできたのだろう。

その肝心の調査が、今はできない。

確かにこれは、酷い事態だ。だが……。

「明智。お前が探してる新聞は、何年のものだ？」

「え？ えーっと、大体三、四年前のものかな」

「分かった」

特技でこの閉書庫の構造を把握する。

どこにどんな資料があるのかを確認して、手探りで歩き出す。

「あてっ」

「あ、ああ、悪い」

「大丈夫だよ、間桐くん」

「いや、悪いな、斎藤」

特技で人の配置を見ることは叶わなかった。そのため、先に部屋に入っていたのだから斎藤にぶつかった。

……ああ、うん。見えなくても分かる。いま、房浪のやつビクツてしたな。

「1980年、1979年、1978年……此処か。明智。1977年から1978年の、どんな記事の情報が欲しいんだ!？」

一応、少し声を張り上げる。今いる場所が閉書庫の中でも奥の方だからだ。

「……すごい便利」

「明智いー?」

ん?

やっぱ奥に來ると聞き取りづらくなつたな。

「ああ、うん。この学校の裏、『穂群原総合病院』に関する記事！」

「病院、ね。了解——！」

大声を張り上げていると、鬱蒼とした気分が晴れているのを自覚する。

ははっ、我ながら人でなしだな。知らず知らず笑みが浮かぶ。いや、もしかしたら自分の意思で笑つてるのかもしれない。

「病院、病院……あつた」

特技で一部一部の内容を調べ、見出しに『病院』と書かれている項目の書かれている記事を探す。

その中で『穂群原総合病院』の記事を選別し、残つたのは六、七件。

「片っ端から読み上げるぞ——！ 『穂群原総合病院の医療ミスを徹底追及』、『穂群原総合病院改築にて一部休業』、『穂群原総合病院の肺炎患者、元陸軍少尉の衛島』、『穂群原総合病院の屋上から転落死？ 安全の見直し』——」

「それだつ——！」

「——『が求められ』つて、これか？」

「ああ、それを読み上げてほしい」

なかなかの量があるので、要約しよう。

この記事はつまり、『穂群原総合病院の入院患者である複数の少年、幼児が屋上から転落死した』ということについて書かれている。

このことについてマスコミが徹底的に叩き始め、屋上に柵が設置されたのだとか。なかなか死者が多い事件だったために、なんと一面記事に乗っていた。探せば別の新聞にも似たような記事があるかもしれない。

一面であるために文章の量も多く、途中で何度か休憩を挟んだ。内容は嫌に詳細で、事件当日の少年たちの大まかな行動や、彼らの病症などまで事細かに書かれていた。

「——以上だ」

「……分かった。他の新聞社の記事で、同じ事件について書かれているのを探してくれ。時間ならある。焦らなくていいよ」

「ああ、分かったが……その、白鳥の特技、でいいんだよな」

「……そうだ」

律汝が犠牲にならなくてもよかったんじゃないか、と言いたくなるのを飲み込む。

分かっているのだ。アレは律汝が勝手に飛び出しただけだ。それに、律汝が押しとどめなければ閉書庫に逃げ込むことすらできなかつたかもしれない。

分かっている。分かっているのだ。

「——つ、は」

息苦しさを感じて思考を中断した。

どうやら、息を止めていたようだ。妙に居たい右手は拳を作っていて、服の胸元を握りしめていた。

それもそうか。今の俺は、まだ少しさっきのが残っているのだろう。

開き直ったと思っただが。

ああ、時臣なら完全に開き直れただろうに。いや、あいつのようにはなりたくないし、これでいいのか？

トラウマにならなければいいが……。

「……ん？ どうしたんだい？ 間桐君」

「何でもない」

再び手で暗闇を探り、次の柵に手を伸ばす。

そして複数の新聞紙の内容を確認したところ、凡その事件の全貌が把握できた。

把握はしたが、がこの事件に二種類の説が混じっていて、どちらが正しいのかは判明しない。

一つ目は少年たちは大病を患っていて未来に悲観していた。故に自殺したという説。自殺説。

二つ目は少年たちは事故死で、自殺説は病院がでっち上げた妄想だ。何て言う事故死

説。

流れとしては、事故死説で事件が報道され、面白可笑しく自殺説が流布され、それに對抗するように事故死説が主張に手を加えた、という感じだ。

成程。こんな流れがあつたんだな。

けども、こんな事件が一体何だつていうんだ？

「……成程、ね」

おーい、明智ー。

一人で納得すんなー。

あと今更だが、この探索の間、怪異は一度も閉書庫には現れなかつた。

本当に怪異はこの閉書庫に入ってこれないようだった。

探索の時間が長すぎて、いい加減目を瞑るのに慣れてきた気がする。目を閉じても開けていても、同じように扱えるだろう。

さて、そういうえば何か忘れてるような……。

一房の浪治める庄、司るは儂く。

明智が黙り込んで、どれほどの時間が過ぎただろうか。

実はそれほど時間は経っていないのかもしれない。時間感覚が暗闇に狂わされ、やがて平衡感覚もおかしくなっていく。

くらくらししてきた俺は、一先ずの安全地帯である閉書庫の中で腰を下ろし、考えた。考えていることは簡単な問題で、シンプルに過ぎるから解決できない。

それはつまり――

「やべえ、ノートおきっぱだ……」

――探索の成果、手に入れた手掛かりを怪異のそばに置き去りにしてしまった、ということである。

不味い不味い不味い不味い。

嫌な汗がぶわうと滲み、息が荒くなっていく。頭を抱えて転げまわろうにも、二三次そこらにぶつけ、斎藤に心配されてからしていない。

下手を打った。雁夜は唯、後悔していた。

外に取りに行くか？

無理だ。出口には明智がいるし、特技で閉ざされたものを唯のピッキングでどうにかできるとは思えない。

……じゃあどうするの？

どうもできないだろう。

ああああああ、しまった失敗した失敗した失敗したああああああ！

ヘッドバンギング。ヘッドバンギング。只管に激しいヘッドバンギング。

しまった。平衡感覚が失われたのはこのせいだった。別に暗闇のせいじゃなかった。

「——つと、なると……よしっ」

「……っ〜！」

「皆、ちよつと聞いてくれ」

パンパン、と。手を打つ音と共に、明智の声が響いた。

先ほどまで雁夜の呻きに満たされていた空間は、いつの間にか明智の声で満ちる。

「このままここでこうしていても、どうにもならない。確かに時間稼ぎにはなるだろうが、何日もここに留まれるわけでもない。食料にも限りはあるし、救援にも期待できない。だってこんな事態だからね。警察が動けるわけがない」

はきはきとした、聞き取りやすい声だ。

改めて思うが、明智は本当に異常事態に慣れているように見受けられる。

名前の通りに殺人事件に巻き込まれたことでもあるのか。警察のできること、出来ないことに確信を持った様子で話している。

自分の人のことは言えないが、彼女が何者なのかとても気に成る。

「——だから、ボクは提案する。『閉書庫を出よう』とね」

「ええっ!？」

上がった声は斎藤のもののみ。

しかし、室内はどよめきに満ちていた。

見えなくても分かる。きつと俺を含めてこの場に居る全員は、明智に対して胡乱な目を向けているだろう、と。

何言ってるんだこいつ、ということである。

いや、言わんとすることは分かる。丁度俺もそれに考えていたところで、外に出れるならお願いしたいところだ。

けれども、一步間違えれば死にかねない行為だ。自分だけでなく、他の奴らまで巻き込むほどの危険。

まさか、怪異の恐ろしさ、危険性を理解していないのだろうか。雁夜はそう思った。

確かに、未だに犠牲者は出ていない。明確な、目の前で犠牲になった犠牲者は。

律汝は別である。自ら進んで死に行くようなことをしたおかげか、未だにどれほど危険なのか明瞭ではない。ただ、漠然と「危険である」とだけわかるのだ。

逆に言えば、危険であることしかわからない。

その程度までは分らないのだろう。

そう、だよな……？

「大丈夫。外にはあのお化けはいないよ。ね、小峰」

「……ああ、さつきから外の気配が無くなっている」

え、気配なんてわかんの？

「……本当に？」

斎藤の声だ。もはや明智と斎藤の問答になっている。

「本当に、だ」

明智が自信満々に返した。まさか、本当に気配がわかるとでもいうのか？

「勝算はあるんだ」

「それは、一体どんなものだ？」

「簡単に言えば、ボクらはお化けから逃げきればいい。それだけで勝てるのさ」

「勝つって……何に？」

「——お化けに、だよ。間桐君」

すう、と息を吸う音。

一拍おいて、明智は怪異の正体と、その解決法を語りだした。

「まず、前提としてお化けはオカルト的な存在として話そう。

トリックとか、ドッキリとか、そんなものじゃないことは理解してくれるよね。

このことをまず念頭に置いて欲しい。

お化けの正体だが、結論から言えば裏手の『穂群原総合病院の死者』で良いと思う。

そう、さつき間桐君が読み上げてくれた新聞の、その子供たちだ。

なんでこうなるのかっていうと、根拠はないわけじゃないんだよ。

ほら、朝礼のアナウンス覚えてるかい？ あの、「一時間目」っていうのが終わった後のやつだ。

普通はあんなのはあり得ない。小学校でも通ったことがあれば、あんな放送はするわけないんだ。だって、そういうのは朝一番が常識だからね。

そんな常識を知らないのは、学校に行けなかった……例えば寝たきりの患者とか、子供のころから病院生活をしてきた子とか、だね。

それと一緒に、一番最初に放送が出た時間について。登校時間のだいぶ前だけど、いや、よくこんな時間にこんな数も登校してるものだね。

ああ、話がそれた。うん。

病院つてのは、患者の健康管理もしているんだ。当然だよ。いくら治療が良からうと、健康管理がなつてないと、意味がない。

だから、入院患者は規則的な生活習慣を叩き込まれる。

具体的に言えば、朝早く起きるんだ。

そのための手段は何かというと、アナウンスだよ。院内放送だ。

流石に看護師が一人一人起こして回るわけにもいかないしね。音は小さいけど、割と起きれるもんだよ。

え、なんでそんなことを知ってるのかつて？ 別にいいだろう。ちよつと腹を刺されて……いや、何でもない。

ああ、んん。つまり、朝七時。丁度「一時間目」のかくれんぼとやらの放送時間くらいだね。

そう、つまりね。ボクはこう言いたいのさ。

『学校生活を知らない病院の患者が、学校に憧れた』

それがお化けの心残りとか未練つてやつなんじゃないかな？

で、定型的に言えばそういう心残りとかを晴らせば、お化けは成仏するもんだ。

では、学校生活を送らせてやればいいのか？

違うんだ。

相手は子供と思ってくれ。学校生活の知らない子供だ。生まれた頃から入院し続けた子供だ。

勉強なんてしてるかは分からないけど、入院してる子供がやりたいと思ってるのなんて大体一緒だ。遊ぶことだよ。

だから、「二時間目かくれんぼ」、「二時間目鬼ごっこ」なんてことをしてるんだと、僕は思う。

ああ、勿論これは憶測だ。確証なんてない。仮説に推論を重ねたも妄想にも近い。でもね、僕はもう、これ以上論理的に現状を説明できないんだよ。

重ねて言おう。

『お化けの正体は、ただ遊びたいだけの子供である』と。

だから、僕らはそれに付き合って、満足させる。

それだけの事だ」

「……成程。確かに、筋は通ってる」

「そうかい？ ベテランのお墨付きなら心強いね」

「ベテランってなんだよ」

筋の通った説明だった。納得のいく方法だった。

ああ、その推測が正しければ、その方法で怪異はなんとかできるだろう。根拠も理論もある、完璧な対処法だった。

神秘というのは人の認識によつて確立されている。人の感情から生まれていると言つても過言ではない、訳の分からない概念だ。

だからこそ、怪異などについて科学的な照明はできない。

その点、これならいける。そう、確信した。

「……………え、でも、そんなことで……………ん？」

「……………」

ひそひそと囁き声が聞こえる。

斎藤と誰かだろう。何を話してるのだろうか。

「……………うん、うん。分かった」

話をついたようだ。

「じゃあ、行こうか」

明智が先導して、ドアを開ける。躊躇いの一切ないその行動に度肝を抜かれつつ、突如として差し込んだ光に目がくらむ。

立ち眩みに似た眩暈と頭痛を感じ、少しふらつとする。眉間を揉んで居ると、心なし

か苦痛が和らいだ。

「うーん。光があると安心するね」

図書室内は明るかった。当然だ。明かりがついたままになっているのだから。

入口間際に歩澱投げられた鞆を見る。遠目には異常は見えない。ノートは怪異に持ち去られていないようだ。

明智、白鳥、俺に斎藤に房浪に。

全員出たところで辺りを見渡し、ふと、違和感に気づく。

明智、白鳥、斎藤、房浪……。

「……あれ？ 隠岸はどこ行った？」

てつきり一緒に隠れているのもだと思っていたが……。

そういうえば、閉書庫内でも声を聴いた覚えがない。というか、逃げ込んだ時に姿を見た記憶もない。

まさか、特技で姿でも認識できないようにさせていたのだろうか？ 怪異に通じるのか？

「ああ、ほんとだ。隠岸さんいないね」

「ほんとだ、どこ行ったんだろ」

明智の心配そうな声は、何処か含みがあるように聞こえた。

それに比べて齋藤は純粹に心配そうに聞こえるから、この短期間で培われた印象の差がわかる。

「まあ、大丈夫だろ」

「え、でも……」

「あいつ、隠れるの上手いぞ。きつと逃げ切ってる」

「そうだといいんですけど」

自分の鞆を取り、中にしまったノートを取り出す。

あの、鏡文字のノートだ。

「なんだい？ そのノート」

「ああ、二階の教室で見つけたノートだ。手掛かりになるかも、と思ってな」

「ふーん」

「ああ、手鏡はあるか？ これ、鏡文字になってるんだ」

「いいよ。はい、これ」

「ああ、ありがとう」

渡されたのは小さな団扇のような形の……まあ、可愛らしい手鏡だ。

「……さん？ どうしたんだい？」

「いや、何でもない」

かわいいところもあるんだな、というよりも、こんな手鏡を持っていることに驚いた。どっちかというと虫メガネの方を持っていそうだったからな。

「んと、どれどれ」

手鏡を使つて飛ばし飛ばしに読んでいく。

内容は、簡単に言えば日記のようなものであつた。

でも、それは簡単に言えばだ。内容が何一つ纏まっていなひのは、俺が飛ばし飛ばしに読んでいるからあろうか。それとも交換日記でもされているのか。

内容からは、明智の推測を裏付けするような……つまり、患者のつぶやきみたいなことが書かれていた。

口語で、割と長々と、筆跡も一定せずに書かれている。

……こんなものが、なんで二階の教室にあつたのだろうか。

「ふうーん」

「うわつ。なんだよおい」

「いやいや、その手鏡はボクのもつた。つまり、それを使つて読む分にはボクも読む権利があるという事だろう？」

「別に読みたいなら見せてやるよ。内容は、入院患者の愚痴みたいな感じだったな」

「へー、そうかい？ そうだね……ふむ」

明智にノートと手鏡を渡し、鞆を担ぐ。

そして明智を見返すと、彼女は最後のページをじっと見つめていた。何かあったのだろうか。

「ねえ、間桐君」

「なんだ？」

「はい、これ。ちよつと、これに学校の構造図書き上げてくれる？ 大体でいいからいきなりこいつは何を言ってるんだ。

言い出した原因は、間違いなくこのページだろう。何が書かれているの。俺も覗き込んだが、どうやらどこかの地図であるということしかわからなかった。

学校ではない。だって複雑すぎるから。

にしても構造図って……何書けばいいんだ？

あの地図みたいな感じで書けばいいのだろうか？

俺は床に這いつくばり、明智からもらった紙切れに大まかな図を書いてやった。床に触れつつ特技を使用したので、正確性は抜群だ。

精密性は保証しないが。

「できたぞ、明智」

「ありがとう……やっぱり、か」

「何がやっぱりなんだ？」

「……この学校、もしかしたら病院とつながってるかもしれないよ」

神の家は常に開かれている。その門戸は広く

——僕は、外の世界という「もの」をとんと知らない。

生まれた頃から、僕の世界は一人用の狭い病室であった。

狭いと言つても、大人数用の病室と比べてだ。長年暮らしてきたから、今となつてはこの方が体に合う。

今年で十と五年になるだろうか。医師が言うには、だいぶ良くなつてきているらしい。

うん、聞き飽きた言葉だ。いつもそう言つてくるじゃないか。

いやさ、悪くなつたときははつきりそう言つてくれるが、変わりはない時がほとんどなのだから僕の病症はお察しだろう。

僕の病気というものは、どうにも奇病という類のものらしく、日本でもこの病院しか取り扱つていないのだとか。海外に行く金もない親は、こうやって僕を入院させている。らしい。

らしい、というのも、僕は殆ど親の顔を見たことが無いからだ。むしろ担当医の方が親しんでる。

何度か親を自称する存在にあったが、やはりどうにもしっくりこなかった。

そりゃあ、病気に苦しむ子供の顔をわざわざ見たくなどないだろうし、頻繁に病院に来るのが可笑しいことであるのも知っている。

治療費、入院費を出してもらっていることには感謝している。それが無ければ、こうして生きていられなかっただろうからだ。

だが、それだけでは養われている自覚など湧きようもないし、恩も湧かない。親、というのは、僕にとって馴染みのない単語だった。

大体、その言葉を初めて知ったのも本でだしね。

庭に出させてもらえる季節になった。春だ。

中庭には桜が咲き誇っていて、綺麗……というらしい。

正直、窓から見下ろす方が好きだ。

というか、桜以外の花を知らないのだから、此処の咲き具合も分からない。

ああ、道端の色とりどりの草なら見たことあるけども、あれも花というのか？

……そうだったのか。じゃあ、桜は……木？

そうか。桜は、木なのか。

てつきりこう、僕の住んでる階ぐらいに高いものだとおもつつえ居たのだが……案外

小さいな。

いや、見上げられるぐらいには大きいけど。

そっかあ……

僕の夢は、学生生活を送ることだ。

僕の病室は院内で最も高い階にあるため、隣接している穂群原学院の、その校庭まで見下ろせる。

学校というのは、多くの人に算数や国語なんかを教える施設らしい。そんなものを覚えてどうするのか、と聞いたら、色々な職業に就くためだと答えが返った。ふうん。

何が楽しいのか、彼らはほぼ毎日——それこそ先生に診てもらおうとする患者のよう
に学校に集まり、授業とやらを受けている。

それは一体、どういう形式なのだろう。聞くところによると、ノートというもの
にいろいろな内容を描くらしい。

羨ましいと思ってみていたら、看護婦の人から「大学ノート」というのを貰った。お
お……。

でも、何を書けばいいのだろうか？

分からなかったので、とりあえず日記にしてみた。

カリカリとペンを走らせていると、次第に息切れしてくる。

握っていたシャーペンは汗にまみれていて、つるつると滑る。

時計を見れば、ほぼ半日近く書きなぐり続けていたらしい。これは確かに、楽しい。文字を書くというのは、僕の趣味である。大した運動もできない僕が唯一全力でやっている行為であり、綺麗な字が欠けたときは爽快感で胸がいつぱいになる。

何に使うわけでもないのに、難しい漢字を覚える。格好いいからだ。

この前、僕と同じように院内生活を送っていた少年と出会い、彼は時折遊びに来るようになっていた。

そんな彼に何故漢字を覚えるのかと聞かれて、僕はそう返した。

格好いい。格好いいのだ。

それ以上の意味は無い。難しい漢字が使えたからと言って病症が良くなるわけでもないし、入院費を軽減できるわけでもない——入院費を負担してもらっている現状は、見知らぬ他人に生命線を握り締められているような怖さがある——から、得も何もないのだ。

無駄な行為だ。無駄なことだ。

でも、その無駄なことを楽しめるようになれば、僕はきつと死んでしまう。

この世に楽しいことが無いなら、生きていく理由がなくなる。

そうだろう？ 暇で暇で暇すぎて、そんな毎日に生きる活力なんてない。

人生とは無駄と負債と間違いを積み重ねるための時間だ。

だから僕は、無駄をこよなく愛している。

最近、友達が増えた。

生涯入院組プランターのあの少年が案外社交的というやつで、他の病室——場合によっては他の

病棟からまでも人を連れて、僕の病室までくる。その度に、看護婦の人に怒られている。

—そんなわけで、今日できた友達をここに書こうと思う。それぐらいしか書くことが無いからだ。

彼の名は、房波庄司。おどおどした、僕とどこか似ている少年だ。

彼は残念ながらプランター組ではないらしく、けれども死ぬまで通院を続けるであろう程度には病弱な少年だった。

歳は、僕と同じくらいだ。身長は僕が勝ったが、体重では負けた。

知っている料理の数でも負けて、でも字の綺麗さでは勝った。

そんな彼は、なんと、「学校」に通う「学生」なのだという！

驚きだ。驚きすぎて、最近覚えた「エクス何とかマーク！」^{エクス何とかマーク}を使ってしまいうくらいだ。

前々から興味のあつた、「学園生活」。それについて聞かためたために、僕はデザートと三時のおやつを犠牲にして彼を引き留めた。

根掘り葉掘り聞きまくって、僕は色々と「学校」というのに対しての知識を得ることができた。

まず、学校というのは「穂群原学院」だけではないということだ。学校というのが穂群原学院の別称でない^{と知って}、僕はたいそう驚いた。

きっと蟻が角砂糖に集るとはああいうのであろう光景を指さして、僕は彼に彼らが学校に通う理由を聞いた。

「なんとなく」だという。

なんとなく。ふむ、なんとなく。

どこか、僕の趣味と似ている。成程、通学というのは趣味の一種だったのか。

更に更に、学校というのには授業があり、それが五時間から六時間あるらしい。

ああ、時間といつても、60分ではないという。「時間」という単位で、一つで50分。場合によっては45分ということもあり得るのだという。

授業と授業の間には休み時間があり、そこで大勢の人としゃべったりご飯を食べて過ごすという。すごく、凄く楽しそうだ。

特に「体育」なんていうアスリート育成講座には驚いた。走ったりするのは楽しそうだが、わざわざそんなことまで教えるというのか。

他にも他にも、理科、社会、道徳、英語……様々な強化と、設備と、朝礼や文化祭、体育祭なんて言う行事も教わった。

彼との会話はそれが最初で、そして最後だったけれど、とても充実した時間だったといえる。

彼には、感謝しかない。

ある日、例の少年が変なものを拾ってきた。

入院患者の誰かが落としたのだろうか。彼の病室に落ちていたという、黒い頭蓋骨。ただし、人のそれを模している割に手のひらに収まるほど小さい。

持ってくる間に壊してしまったのか、下顎の向きが逆さまだ。やってしまった。確か何処かにポンドがあったから、それで直そう。

ぐぐぐ……と力を籠めるも、顎は外れない。

どうやら、この形が正常なものなのかもしれない。よくわからないセンスだ。くれるというので、ありがたく貰った。しかし、何処に置けばいいのだろう。

枕元に置いたら、看護婦に気味悪がられた。新人さんなんかは露骨に引いてた。その後、少年が探検に誘ってきた。

それに賛成した僕は、院内を隅々まで見回ることを暫くの日課とした。

いろんなところに院内の地図があつたので、迷わないようにノートに書いておく。でも、他のと混ざらないよう、一番最後のページから書くとしよう。

——もし、何か願い事をかなえてもらえらるなら。

僕は何を願うのか。

看護婦の持ってきた絵本をいつもの少年たちに読み聞かせていると、ふと、そんな疑問が湧いた。

絵本の内容が、「イルカさんが願いを叶える」というものだったからだ。枕元に抜けた歯を入れて、そのまま寝て、みた夢を叶えるのだという。

僕なら、学生生活を送らせてほしいと願う。

ああ、通学するというのは、どれぐらい楽しいのだろうか。

毎日友人と遊び、勉強するというのは、どんな感じがするのだろうか。

想像することしかできない僕は、想像することで彼らの気持ちになつてみる。

まずは、はやり切れない気持ちを抑えるために授業受けるんだ。それが終わったら、

大体の遅刻者も教室にいるだろう。それから、全校朝礼というのをするのだ。

それからそれから、五時間授業を受ける。ああ、昼ご飯の時間も入れなければいけないのか。

あと、図書室というのも行つてみたい。たくさんの本があるというのだから、僕が読んだことのない本もきつとあるだろう。

喧嘩もしてみたいな。机を持ち上げたり、椅子を投げついたり、殴つて殴られて絡み合つて。

きつと楽しい。

そんな話をする、看護婦の人に苦笑いされた。

少年たちには賛同されたので、きつと間違つてはいない筈だ。

ところで、歯はこの髑髏の物を圧し折つて代用してもいいだろうか？

ちようどペンチが手元にあるのだけけど。

神様は言った。

願いをかなえてやると。

そしてこういった。

その前に、代償を払えと。

だから僕は死にます。学校に通いたいから。遊びたいから。

文字を書く以上に楽しいことが、そこにあるのだから。僕は飛ぶ。

神様は、魔法使いさんだ。指を振って看護婦の人を眠らせたり、凄いいことが出来る人だ。

そんな凄い方だから、きつと僕の夢も叶えてくれるだろう。

だから、このノートを見た人に言います。どうか、僕のことには気にしないで。

僕は、自分の意思で死ぬのです。

さようなら。

風が吹く。風が吹き抜けていく。

看護婦の人は立ち入るのを許してくれない、屋上。そんなところにきている背徳感が、僕の胸をどきどきさせる。

怖い、といえばいいのだろうか。この胸の高鳴りは。

ぎゅつと病人服の胸元を握り、左手に齒の欠けた髑髏を持って一歩進む。

「うわあ……」

広い。

六人部屋とか、ナースステーションとか、広間とか。

そんなものが目じやなくらいに、広い。

どれぐらい広いのかというと、適切な表現はしづらい。でも、とにかく広いのだ。

どこまでも遠くまで見える。すぐそばに青空がある。てうおのばせば、その天井に手が届いてしまいそうだ。

「さて、とつとと歩け」

神様が言った。

神様は、僕が死ぬことを望んでいる。

人が死んだときに出てくる、エネルギーというのを神様は欲しがっているのだ。ソレを使つて、神様は僕の夢を叶えてくれるという。

でも、それには強い覚悟が必要だと聞いた。

そして、覚悟を鈍させないために、決意してすぐ死ぬことが大事だとも。

横には、いつもの少年がいる。彼以外は、来ていないようだ。

僕は彼に聞いた。きみは、何を望んでいるのかと。

すると、彼はこう答えた。

「くるしいのがよくなるのー」

病気を治す、という事でいいのだろうか？

成程。そういうのもよかったかもしれない。

でもま、学校に通えるようになれば、ついででこの病気も治るだろう。

「へくちっ」

風が吹いて、僕は寒さを思い出す。

寒さに耐えるには心もとない病人服を着ているからだ。せめて、セーターか何かを上に着て来ればよかったかもしれない。

さあ、さつさと済ませてしまおう。

僕は屋上の淵、柵が並んでるところを乗り越えて、下を見下ろした。

「高いなあ」

そうつぶやいた。

別に、怖くは無い。

ただ、そういう感想が浮かんできて、そうつぶやきたくなっただけだ。

隣の少年も、寒くて震えている。さっさと終わらせよう。

「どつちが先に行く？」

此処は、年長者として先陣を切るべきだろうか。

少年が踏み出さないので見て、僕はため息を吐いた。

仕方ない。僕が見本を見せるとしよう。

一步、空を切るように足を踏み出し——僕は頭から地面に落ちる。

ぐしゃりと、土がへこんで首が折れて、頭が潰れる音がした。

叩きつけられた生肉の音は、誰も気づかない。

「ひう……！」

地上に咲いた赤い花を見て、少年は今更怖気づく。

正気を取り戻したかのように、死ぬことに怯えてしやがみこんだ。

下を見ることすら怖いようで、その場でぶるぶる震えている。

そんな彼を、神様——一人の男は悪態をつきながら促した。病気を治したくはないのか、と。

今頑張れば、もう苦しくなくて済むんだぞ、と。

「う、ううう……！」

少年はうめく。

怖い。死ぬことは怖い。とても痛そうで怖い。

でも、「びょうき」はそれ以上に苦しくて、居たくて、つらいのだ。

でも。でもでも、死ぬことはそれと同じくらい苦しそうだ。それ以上かもしれない。

頭をぶつけるだけでも痛いのに、あんなに強くぶつけるなんて……。

大体、苦しいのを何とかするために苦しむのは、おかしいよ。

そう思い、顔を上げた瞬間に、少年は前に倒れこむ。感じたのは衝撃。背中に。

男が、その背中を蹴ったのだ。

「ううわああああ——」

遠ざかれど小さくならない悲鳴。それに、男は鼻を鳴らす。

「学校に通いたい？」

——地縛霊になれば好きだけ通えるさ。

もう苦しみたくない？

——死ねばもう苦しむこともない。

お前らの願いも叶えて、俺も助かる。ここまで配慮してやっているのに、これだから愚図は」

懐から取り出した試験案を一振りし、一見空のそれに蓋をする。

その後、彼は踵を返し——あとは騒めき始めた病院だけが残った。